

---

# 眠り姫の起床時刻

三条司

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

眠り姫の起床時刻

### 【Nコード】

N9908E

### 【作者名】

三条司

### 【あらすじ】

【2/24更新しました】勇者は元・農民で重度のシスコン。パーティーメンバーは、セクシー魔導士とロリータ賢者。助けに行くのは、曰くありげな公女様。敵は泣き虫魔女。「こんなつもりじゃなかった」旅、はじまりはじまりです。

## Prologue：眠れるお城のひそひそ話（前書き）

河童で出会った皆さん、お久しぶりです。

誰だお前、と言う方々、はじめまして。三条司と申します。以後、お見知りおきを。

連載ものとしては、二作目になります。

べったべたのファンタジーが書きたくって始めました。どうか、楽しんでいただけますように。

## Prologue：眠れるお城のひそひそ話

すすり泣く声が聞こえてくる。

大理石で出来た廊下はぴかぴかに磨き上げられていて、ところどころに設置されたアンティークの家具や、これまた年代物の甲冑などを映し返していた。一点の曇りもない窓には深い赤のビロードのカーテンが、カーテンを束ねるのは上品なベージュ色のカーテンタッセル。

窓から見える景色は、手入れの行き届いた中庭。中庭の真ん中を通る道には真つ白な砂利が敷き詰められていて、それは真つ直ぐに重厚だが気品のある高い門扉へと続いている。小道の中程には、それぞれ左右にひとつずつの噴水。さらさらと流れる水は、時折吹く風によって霧のように霧散していった。

ひとを圧巻させるには充分な大きさの建物は、城と呼ばれるのがふさわしい。その威圧的な名称とは対照的に、その雰囲気はあくまでも友好的で開放的だ。

だが、今その建物は、それを満たす決定的な何かに欠けていた。

人の気配。そして、声。

あまりにも静かな城からは、ひとはおろか、獣の気配すらしない。

モンスターに襲われたにしては綺麗な内観は、それに清浄過ぎる空気を相まって、一種神殿のような雰囲気包まれていた。

ただ、ひとつを除いて。

建物の最上階。 客人などは近付かないであろうプライベートな部屋から、その泣き声は聞こえていた。

部屋には、ふかふかと毛足の長い絨毯で覆われた床。 広々とした部屋の中央に鎮座した、天蓋付きのベッド。 サイドテーブルに乗ったのは、繊細なガラス細工を施されたグラス。 中庭を展望出来るバルコニーに続く窓からは、柔らかな光が差し込む。

ベッドの上には、一人の少女が眠りに就いていた。 閉じた瞼には、長い睫毛が縁取られていて、うつすらと薔薇色に染まった頬は上等のビスクドールを彷彿させる。 華奢な体躯を包むのは、豪華なドレス。 たくさんのフリルがついた袖から伸びた手首は、それだけで芸術品のような指へとなめらかな曲線を描く。

その指を、ついと掴む手が現れた。

指を強く握っても、ベッドの少女は何の反応も返さない。 それを見て取ると、すすり泣く声はますます激しく、そして哀しみの色を強くした。

声は若いというよりも幼く、指を離れたその人影は小さい。 ベッドの少女ほど豪華ではないが、きちんとしたドレスを身にまとったのは、同じく少女。 顔を両手で覆ってすすり泣く彼女の顔は誰にも見えないが、その長い銀髪と頭から生えたそれは否が応にも他

の目を引く。

その頭部からは、鹿のものによく似た角が二本、生えていた。

「こんなつもりじゃ、なかったのに……」

さめざめと泣く少女の、手に覆われてぐもった眩きは、人の気配が消えてしまった城においては、誰の聞き手も望めなかった。

ACT I ; Scene 1 : 拝啓、妹君

ノルマントン大陸において、絶対的な力を持つオード帝国。その東には南北に伸びる魔法国家ヴェランデ。北方には魔法騎士団で有名な、小さな独立国家を築くロクサンヌ公国。互いの力の源は違えど、軍事力に秀でたオードは、魔力に秀でたヴェランデ、ロクサンヌ両国と友好的な関係を結んできた。

オード帝国東部、ヴェランデとの国境にほど近いディグオス村。

その称号にふさわしく、こじんまりとした大きさのその集落は、しかし、争いのない平和な農村だった。そこでは、都会では古風と揶揄されるような慣習も未だ残っており、人々は毎日の営みを一所懸命にこなしている。

「アメリカ……」

そう切なげに呟くのは、グレン・トライブ。こここのところ、テレンシア公国領、ダラム市において街の人々の注目を浴び続けている青年である。

年の頃は十八歳といったところか。秋の収穫で農民なら顔をほころばせそうな麦穂のようなブロンドは、毛先が少し褪せてぴよんぴよんと立っている。うっそりと細められる瞳は、芳ばしそうなヘーゼル色。体軀はかなり立派な方で、だからこそ、彼が背中を丸めて、その体と比較すると小さく見えるテーブルに頬杖をつく姿は少しばかり滑稽だ。

「アメリカ……、兄ちゃん、本当にこれで良かったのかな……」

手にした陶器のグラスの中身はアルコールではなくて、ただの山羊のミルク。酔っているわけではないらしい。

「兄ちゃんは、心配だ。アメリカは元気でやってるのか。じいちゃんとふたりで、おれがいなくて、誰が畑の世話をしている？ アメリカ、間違っても、村の若い衆には頼むんじゃないぞ？ 何てったってアメリカくらいかわいいこだからな。みんな、アメリカを嫁にしようと企んでいるに決まってる。そうだ。そういう輩からアメリカを守るのも、兄ちゃんの役目だったよな。なのに……。はあ……。兄ちゃんは、何をやってるんだろうな……」

昼間っから宿の一階にある食堂で、酒もなしに女もなしに独り言をぶつぶつと呟くグレンの姿は、食堂連中から奇異の目に晒されていた。だが、そんなことに気付く素振りも見せない純朴そうな青年は、日が昇ってから何度目かというため息をつく。

そう。すべては、あの日から始まったのだった。

グレン青年は焦点の定まりきらない瞳を、腰にぶら下げた帯剣に向けた。

この、名剣「ファイアツマ・バグリア金穂の炎」が、そもその始まりだったのかもしれない。

ディグオス村において、男女の役割は明白だった。即ち、男は



畑仕事に精を出し、収穫された作物を周辺の街で売り歩く。女は家を守り、子どもを育てる。村内での人間関係は、大きくなった家族とでも言うべき親密さ。男女は、それなりの年齢に到達すると、村長と村役員と呼ばれる数人の老人たちの取り決めによって、結婚をし、場合によっては家を建て新たな畑を作り、子孫を作る。

ただ、そういった環境にあって、グレンのものは多少変わっていたのかもしれない。まず、グレンは母親の顔を知らない。グレンを産んですぐに他界した。母なし子と苛められることもあったグレン少年を心配した父親ハリーは、グレンが六つのときに、グレンの祖母の死もあって隣村の女性と再婚。その二年後、彼女の腹が大きくなったときに、父親に言われた言葉を、グレンは今でも鮮明に覚えている。

「グレン。もうすぐ、グレンはお兄ちゃんになるんだ。そしたら、お前は命がけでそのこを守ってやんなきゃなんねえ。お兄ちゃんってのは、そういうもんだ」

祖父、父親と共に、台所のあるテーブルを囲んで待つこと数時間。新しい母親から生まれた新しい生命は、グレンの心を喜びでいっぱいにした。

自分と同じブロンドの髪に、自分のものよりもずっときれいなブルーの瞳。アメリカと名付けられたそのいたいけな存在は、生まれ出た瞬間から、グレン少年の生き甲斐となった。それは、アメリカが三歳のときに、両親が事故死したことによって、更に思いを強めることとなる。

「お兄ちゃん。グレンお兄ちゃん」

そう呼ばれるたびに、こころが踊った。笑顔を向けられるたびに、どんな困難なことも乗り越えられると感じた。その背丈が年々伸びていくのを、奇跡のように感謝した。自分が愛する存在が、自分を必要としてくれていることに。消えていつてしまわないことに。

だから、アメリカの行くところには、どこへだってついていった。エミリーとの花摘みにだって、アンナとのかくれんぼにだって。

キャロルとお泊まり会について行こうとしたら、遠慮して欲しいと言われたので、仕方なくこっそり後をつけて、アメリカの姿が確認出来る家のすぐそばでその日は野宿した。秋も深まる頃だったから、ちよつとばかり寒い気もしたけれど、それもすべてアメリカのためだと思えば我慢出来た。村の小さな塾で読み書きだけは習いたいとアメリカが言ったとき、グレンは焦った。塾なんかに行ったら、アメリカの可愛さでもってして、今までお近づきになれなかった村内のはな垂れ小僧やませた色ガキ共が、こぞってアメリカの隣の席を奪い合うだろうと予測されたからだ。グレンは、自分もその塾に通うことを決め、クラスの中で一番体格の良い、年齢も上の生徒としてアメリカが暴徒に襲われないように通い続けた。

もちろん、その間畑作業をおろそかにするわけにもいかないので、これまでに培った筋肉を存分に発揮させて、塾が始まるまでの朝と塾が終わってからの午後で、大人なら丸一日かかる量をやったのけた。

つまり、グレン少年の妹への愛は、明らかに行き過ぎで過保護なのだが、本人にそのような自覚は毛頭なく、尚かつ、村一番の力持ちであるグレンにそのような忠告をする者もおらず。かくしてグレンは自分の過剰な愛が、至極まっとうなものであると認識したまま、これまで生きてきた。

そのアメリカが「勇者」と呼ばれる存在に憧れを抱くようになったのは、いつのころからなのだろう。

ある日、畑作業を終えて帰ってきたグレンに、頬を上気させて興奮したていでアメリカが話しかけてきた。

「おかえりなさい、お兄ちゃん。あのね、すごい話を聞いたの、あたし！」

大きくなったといっても、まだ十歳の妹である。グレンはたちまち相手を崩した。

「何だい、僕の可愛いアメリカ」

「んもう！その言い方、やめてっば。あたしはもう、十歳なんですからね」

「そうだったね、兄ちゃんが悪かった。それで、すごい話って、何かな？」

首にかけた布で、額の汗を拭き取りつつ、グレンは椅子に腰掛ける。鍋を掻き回していたらしいお玉を持って、アメリカはグレンのそばに立つと、目をきらきらとさせた。

「あのね！ あるんだって、勇者さまの剣！」

「勇者さまの、剣？」

「そう！ あのね、えっと、この村から、ちょっと外れたところらしいんだけど」

「まさかアメリカ、おれが畑に出ているときに、村から出たんじやないだろうね？ いつも言ってるだろう、外には、可愛い可愛いアメリカを狙う、変態がたくさんいるからって」

自分がまさか、俗にシスコンと呼ばれる変態カテゴリーに属するとは、夢にも思わないグレン青年である。

兄の絡みづらい言動にも慣れっこのアメリカは、何事もなかったのかのように会話を軌道に戻した。

「そうじゃなくて。あのね、ロジャーおじさんに聞いたの。山羊のミルクをもらいに行ったときにね。ロジャーおじさん、昨日、巡行から帰ってきたところなんだって。それで、立ち寄った街でね、勇者さまの剣を見たんだって！　すごいと思わない？」

「そうだねえ。アメリカは、勇者さまが大好きだもんなあ。よく、そういう本も読んでるし」

「お兄ちゃんたら。あたしが好きなのは、実在する勇者さまよ。本を読むのは、この村には勇者さまにふさわしいひとがいないからだわ」

なかなか、シビアでシニカルな意見なのが、グレンは違った解釈をしたらしい。そしてそれは、アメリカの思った通りの反応だった。

「そうか……。兄ちゃんがアメリカの勇者になるには、何か足りないんだな」

「そう！　そうなの！！　お兄ちゃんは、絶対に資質があるの！　だって、背も高いし、がっしりしてるし、力持ちだし、強いし、優しいし、ブロンドだし、剣とか鎧とか冒険が似合いそうな顔してるし。だからね、お兄ちゃん。勇者さまの剣を見に行きましようよ」

「ええ？」

「ロジャーおじさんが言うには、勇者さまの剣は、その持ち主を待っているんですって。何でも、誰にも抜けない剣らしいの。」

でも、きつと、お兄ちゃんなら抜けるわ。　だつて、お兄ちゃんは、あたしのお兄ちゃんなんだもの！　ね？」

熱っぽく語つて、最後には首を可憐に傾げることも忘れない。

自分の魅力を最大限に利用したアメリカのスピーチは、ただでさえバイアスのかかっているグレンの目には、どこぞの女神様のように映った。

ぐつとガッツポーズを決めて、グレンはアメリカを見つめる。  
何て可愛いんだ、妹よ、などと思いながら。

「そうだな、アメリカ。　それを抜ければ、兄ちゃんは、正真正銘の勇者さまだもんな。　よし、行こう！　兄ちゃんがすごいってことを、アメリカに見せてやるぞう」

「さつすが、お兄ちゃん！」

手をぱちぱちと叩いて、アメリカが喜ぶと、グレンは目尻をだらしなく下がらせて破顔した。

「ところで、それはどこなんだ？」

「ええとね、ペサー口って街ですって」

「どこだ、それ」

「さあ」

兄妹は、めいめいに首を傾げて、聞いたことのない地名を口にした。　ペサー口？　ペサー口。　ペサー口かあ。　ペサー口ねえ。

「わからんな」

「あたしも」

「どうしようか」

十歳の少女に丸投げしてしまうと、グレンはアメリアの後方でぐつぐつと音を立てている鍋の方を気にかける。そういえば、おなかがすいてきたな。

「おじいちゃんに、聞いてくる！」

手にしていたお玉を兄に渡して、アメリアは機敏に、二階で休んでいるはずの祖父のもとへと駆けていった。

ACT I ; Scene 1 : 拝啓、妹君（後書き）

「金穂の炎」は正式名称をLa fiamma della pagliaと言います。

これの名称は、国によって変化するのですが、そのへんはストーリーが先に進んでから説明することにいたしましょう。

## Scene 2 : 運命ではないかもしれない出会い

「ふわあ……」

欠伸とも感嘆とも取れる擬音語を紡いで、グレンは大きく空を仰ぎ見る。肩にしまった布のサックが、彼がくるりと首を回すたびに通行人に当たっているのだが、本人は気付かないらしい。ヴェランデでは、ブロンドは珍しい。それだけでグレンとアメリカの兄妹は目立っていたのだが、そこへもってきてグレンのお上りさん丸出しの態度は、国境にある街ピアチェンツァの人々の失笑を買っていた。

「グレンお兄ちゃんたら。そんなにきよろきよろしていたら、勇者さまらしくないわ」

「あ、ごめん」

もうすっかり、アメリカは兄を勇者にするつもりでいるので、自然と口調がしつけ役のそれになってしまう。可愛く口をすぼめる妹を見て、グレンは従順に謝った。勇者がぺこぺこするものなのかは、この際、議論するべきではないのかもしれない。

「でも、びつくりしたわ。おじいちゃんが、勇者さまの剣を知ってたなんて」

「それでも昔は、色んなところを渡り歩いたもんよの」

「すごい！　じゃあ、ここにも来たことがあるの？」

「もちろんじゃ。世界はのう、わしの庭みたいなもんじゃからのう」

「すごい、すごい！」



明らかに誇張された祖父、ベンの言い分に、アメリカは狂喜乱舞する。ただし、これは不自然なことではなかった。デイグオス村において、外の世界を知るということは、すなわち男として優秀だとアピールすることと同じになるからだ。基本的に、女性は滅多な事でもない限り、外出などせず、精々が隣村まで。

「あれ？ 何だ、あのひとばかり」

のんびりとグレンが呟く。当初の目的をまったく忘れてしまっているグレンは、村の青年たちに頼んだ鶏の世話や畑の世話のことを考えていた。

「え？ なに？ なに？ 見えないわ」

ヴェランデ人は、オード人よりも基本身長が低い。オードでも長身の部類に入るグレンは、それこそ頭ふたつ分ほど飛び抜けていて、そのせいで遠くにある人だからがよく見えた。加えて、田舎暮らしで培った視力は、ほぼ野生のそれだ。反してアメリカは、通行人に埋もれてしまいそうな身長なため、兄の見つけたものを目に止めることができなかった。

両手をこちらに伸ばしてきた妹を軽々と抱きかかえ、グレンは彼女を肩の上にちょこんと乗つけた。

「あ、ほんと！　すごい人だね。　きつと、あそこにあるのよ！」  
「何が？」

「もう！　お兄ちゃんたら、忘れっぽいんだから。　勇者さまの剣でしょ」

「勇者さまの、剣？」

「誰も拔けない、勇者さまの剣！　それを抜いて、お兄ちゃんが

勇者さまになるんですよ」

「……………」

手乗り文鳥よろしくぴいぴいと喋るアメリアを肩に、グレンはしばしの間思考する。 勇者さまの剣。 そういえば、そんな話があった気がする。

「お兄ちゃん？」

「ん？ あ、ああ。 思い出した、思い出した。 そうだった、そうだった。 じゃあ早く、抜きに行こう」

「うん！」

鳩並の記憶力を見せつけて、グレンは妹と祖父と連れ立って、人だかりの方向へと向かっていった。

「さあさ、寄ってらっしゃい、見てらっしゃい。 これが巷を賑わせている、名剣、ファイアツマ・バグリア金穂の炎だ！ こいつは、大気中に存在してる火の女神さんのキスを賜ったってえ、すんげえ代物だ。 こいつを使いこなせれば、勇者になるのも夢じゃねえ。 おっと、質屋に入れようなんて考えちゃあいけねえぜ？ 何せ火の女神は、嫉妬深いって話だからな。 さあさ、こいつを抜こうって気概のある奴あ、いねえのかい！」

石で出来た四角い台の上に、大振りな剣が一本、刺さっている。 刀身の半分くらいまでが台の中に埋もれていて長さは計りかねるが、柄の部分には大きな赤い石がはめ込まれている。 宝石などを見たことがなかったグレンには、それはまさに燃えさかる炎のよう

に見えた。台からは数段の階段があつて、剣が収まっている台よりも更に大きな台が設けられていた。それを囲むようにして人だかりが出来、その中心では男が、剣のたたき売りでもするかのよう  
に朗々と口上を並べている。

しかし、ヴェランデ語を解せぬグレンたちには、男の言葉はちんぷんかんぷんだった。

「あれ、何て言つてるのかな」  
「さあ」

兄妹で首を傾げたそのとき、背後から声をかけられた。

「あら、オードのひとつ？」  
「珍しいねー」

振り返れば、ふたりの少女の姿。

ひとりは、すらりと背が高い。女性としてはかなりの高身長だ。青に近い紺色の髪はまっすぐに腰のあたりまで伸びて、時折吹く風にゆらめく。切れ長の瞳はヴェランデ人に特有の、濃い茶色。肌もこころなしか、オード人よりもこんがりと日焼けしている。肩を出したデザインの着に、ふとももの付け根まで入ったスリット入りのスカートを穿いている。全体的にアダルトな雰囲気がつきまとう。

もうひとりは、対照的に小さな少女。アメリカよりも少し高いくらいか。ゆるくウェーブのかかった栗色の髪をツィーテールに結わえ、薄いブルーの瞳には好奇の色が光る。フリルがふんだんにあしらわれたドレスは丈が短く、膝の上までくる白いソックスの付

け根にもフリル。そして特筆すべきは、その上半身。全体的に華奢な体つきにきゅっとくびれたウエストからは想像も出来ないほどの豊満なバストが目を引き。

男性の多くは、このスレンダーセクシー美人が、ロリータ巨乳少女に心奪われてもおかしくなかったが、あいにくと、グレンの脳はアメリカ以外の女性は琴線に触れないようになっていて、それが普通かどうかはまた、別として。

グレンは、ふたりの少女と声を張り上げる男とを見比べて、そして、

「あれ？ このひとたちの言うことは分かるのに、やっぱり、あのおっさんの言うことは聞き取れないや。近耳きんじかな」

「何よ、近耳キンジって」

セクシーなハスキーボイスで少女が問うと、グレンはいともなげに答えた。

「近視の耳って意味」

「ないわよ、そんな言葉！」

見た目のロリータ具合を裏切らないロリータボイスで突っ込まれる。

「あんたねえ。オードで話されているのは、オード語。ここはヴェランデだよ？ ヴェランデ語を話すに決まってるじゃないか」「そうなのか？ ていうか、オード語なんてあったんだな。みんな、同じ言葉を話すのかと思ってた」

「どこの田舎者よ……。あなた、どこから来たの？」

「デイグオス村」

「どこよ、それ」

げんなりとロリータ少女が顔をしかめた。

「あの！」

グレンの肩から、アメリカがふたりに声をかける。

「初めまして。 わたし、アメリカ。 アメリカ・トライブって言います。 こっちは、おじいちゃんのベン・トライブ。 そして、お兄ちゃんのグレン・トライブです」

「あらあら。 妹さんは、ちゃんとしつけがなってるみたいねえ」  
「頭の出来も、お兄さんとは少し違うみたい」

くすくす笑いで少女たちは意地悪なことを口にするが、アメリカへの賛辞の部分しか理解出来なかったグレンは満面の笑みを浮かべる。

「そうだろー？ アメリカは可愛い上に、頭も良い将来有望なこなんだ。 なー、アメリカ」

「ちょっと、お兄ちゃん。 そんなことは、今どうでもいいんだってば」

「どうでも良くないぞ、アメリカ。 アメリカがいかに素晴らしいかかっていうのは、真実だからな。 みんなに教えておかないと」  
「あとでしようよ」

困り顔のアメリカに、少女たちが助け船を出す。

「じゃあ、こっちも自己紹介。 私は、ユリア。 ユリア・モー

スタン」

スレンダー美人がにこりと微笑めば、ロリータ少女が天真爛漫な笑顔を振りまく。

「あたしは、ニーニャ・ガルダス。　ニーニャって呼んでね」  
「それで」

ふたりはそこで声を顰めると、グレンを覗き込むように距離をづめた。

「グレン、だっけ。　ここに、何しに来たの？」  
フィアツマ・バグリア  
「金穂の炎が、目的？」  
「うん」

すんなりとグレンは首を縦に振る。

「おれ、あれを抜いて、勇者さまになるんだ。　なー、アメリカ」

グレンのお馬鹿な発言を耳にして、ふたりの少女はにやりと視線を交わして微笑んだ。

**S c e n e 2 : 運命ではないかもしれない出会い（後書き）**

グレンは、G r e n T r i v e、ユリアはJ u l i a M o r s  
t a n n、ニーニャはN i n n a G a r d a s（aの上に）を付け  
た方です）。

### Scene 3 : Who is GANSAKU?

「あの剣はね」

まるで聞かれてはいけないことのように、ニーニヤが声を落とす。

「最近、この近くの遺跡から見つけられたものの。考古学者のせんせーたちがござって、これは名剣だーって叫ぶもんだから、あっちこっちから勇者志願の剣士たちが大陸中から集まってくるのよ。ただね、見ての通り、剣は台座の中に埋まったまんまで抜けないのよね」

ほう、と思わせぶりにため息をつく、絶妙のタイミングでユリアが後を引き継いだ。

「もちろん、塚の部分を調べた学者の言うには、あれが贋作である可能性は低いって」

「がんさく？ 人？」

「違う！ が・ん・さ・く！ 良くできた偽物ってこと！」

「え？ あれ、偽物なのか？」

「ちっがーう！ 偽物ではない、つまり、本物だってこと！」

「なんだ。じゃあ、初めから本物だって言えばいいのに」

「初めっからそう言ってるじゃない。贋作ではない、って言うてるんだから」

「がんさく？ 人？」

「違うって！」

下手をすると無限のループに陥りそうな予感を嗅ぎ取って、ユリアは苛立たしそうに髪をかき上げ、鼻から息を出した。グレンは



ぽかんとそのヘーゼルの瞳を純朴に開いたまま、すいませんと謝る肩のアメリカを見つめる。

「どうしたんだ、アメリカ？」

「お兄ちゃんは、大人しく話を聞いていてよ。あとであたしが、ちゃんと説明してあげるから」

八つも下の妹に、多少呆れた声音でそう言われても、グレンの極太の神経は何も感じない。素直に破顔すると、アメリカは優しいなあ、などとのたまった。

「ちよつと、こいつ、やばくない？」

肩を落としたままのユリアに、ニーニヤが話しかける。幸い、グレンがアメリカに見とれて、アメリカがそれを叱りつけているため、こちらに注意が向くことはない。

「うん……ちよつと、かな。まあ、様子見てからってことで」

「どうかしましたか？」

「あ、うつん！何でもないの！」

両手を左右に振って、ニーニヤが歯を見せて笑う。と、近くを通りかかった中年の男性がそれを見て、だらしなく目尻を下げる。嫌悪の表情も露わに、ニーニヤが男性を睨み付けると、ますます男性は目を三日月のように細めた。

「お嬢ちゃん……」

「行かない！ 呼ばない！ しない！！」

ふらふらとこちらに寄ってきた男性が言い終えるより早く、ニー

ニヤが噛み付くように早口でまくしたてる。

「まだ、何も……」

「だから！ あたしは、おっさんとどこにも行かないし、あなたのことをおじさまだの何だのって呼ばないし、おっさんが望んでいるようなことはどれもしない！ あっち行ってよ！」

「おお、おお、可愛いなあ」

「んも~~~~~。 ユリア」

半泣きの顔をユリアの方に向けると、ユリアはするりと男性の前に立ちはだかった。そして、一言。

「痛い目に遭いたいのか？ おっさん」

「ひっ」

ドスのきいた声で言われ、男性は目が覚めたみたいに小さく悲鳴を上げて、そのまま後ずさりをする。ニーニヤを庇うように立つユリアのせいで、男性にはニーニヤの姿がまったく見えない。ユリアがもう一度、睨みをきかせると、男性は今度こそ回れ右をしてさっさと姿を消した。

「ありがとう、ユリア」

ニーニヤがほっと息をつくとき、ユリアは口を片方だけ歪めてふんと笑う。

「あれが、がんさく？」

「お兄ちゃん！ がんさくは、人の名前じゃないってば！」

去りゆく男性の背中を見てぼつりとグレンが言っと、アメリカは

大仰に天を仰いで叫んだ。そして、再度、目の前の少女たちを見つめて、ぺこりと頭を下げる。

「ごめんなさい。お兄ちゃん、決してひとが悪いわけじゃないんだけど、ちよつと空気が読めないっていうか、脳みそも筋肉になりかけてるっていうか、運動神経のために知性を犠牲にしたっていうか、むしろこれで勇者でもなかったらそれこそただのお馬鹿さんに成り下がってしまうっていうか、とにかく、心根が腐っているわけじゃないんです！腐るほど、知能指数があるわけじゃないですから。だから、ユリアさん、ニーニヤさん。お兄ちゃんが、ただの馬鹿になつてしまつのを阻止するのを手伝ってもらえませんか？あの剣を抜いてしまつのが、一番手っ取り早いんですけど、あれって何かいわくがあるんですか？」

「あんたつて……」

「あなた……」

その後を、ユリアもニーニヤも口には出さなかったが、思いは同じであつた。すなわち、小さいのに、結構辛辣なことを言うのねと。

我に返つたふたりは、アメリカはそんなにお兄ちゃんが大事かなどと涙を流しているグレンをこの際無視することにして、脱線していた話を元に戻す。

「塚に埋め込まれた石はルビーなんだけど、ルビーはルビーでもヴェランデでしか取れないルビーなの。そして、それは一様に火の女神の祝福を受けていると言われているわ。それを塚に埋め込むなんてことは、魔法に長けた人間にしか出来ないこと。つまり、あの剣は、火の魔導士が作成した剣」

「そして、魔導士が作った剣は、その瞬間から、鍛冶屋の作った

剣とは一線を引く。 あれはね、アメリカちゃん。 剣は剣でも、魔剣と呼ばれる類のものなのよ。 だからこそ、あれには名前がある。 ヴェランデ語ではフィアツマ・パグリアっていうんだけど、オードだと多分、フレーム・ストローって呼ばれてるんじゃないかしら」

「フレーム・ストロー？ 稲穂の炎？」

「そう。 もちろん、あれは発見されてから誰も使っていないから、その効用のほどは分からないんだけど、文献が残っていてね。 フィアツマ・パグリアは、一太刀で炎の穂をつけるっていわれるの」

「魔剣だからね。 魔力のない人間が使っても効用は同じ。 ちなみに、グレンは魔力はあるの？」

「えっと、どうだろう。 お兄ちゃん、魔法使える？」

話を聞いているのか聞いていないのか。 それとも、聞いても理解できないだけなのか、静かにしているグレンに、アメリカが声をかけた。

「おう！ お兄ちゃんは、アメリカのためだったら、かぼちゃを馬車にすることくらい、何てことないぞう」

「…………… えっと、ないみたいです」

「…………… 生まれた時に、調べなかった？」

「はい…………… たぶん」

「そっか。 ヴェランデだと、新生児にね、石を持たせるの。

その石がどういう変化をするかによって、そのこの資質を調べることが出来るのよ」

「その慣習なら、オードにもある」

今まで立ったまま眠っていると思われたベンが、急に口を開いたので、女性陣は大いに驚いた。 ユリアにいたっては、右手を心臓

に当てて、呼吸を落ち着けている。

「そうなの？ おじいちゃん」

「あるとも。ただし、石もただではないからのう。ディグオスで、そんなもん金に金かけられるやつはほとんどおらん。そもそも村の人間は、魔法の資質など関係のない生活を送っているからの、不便でもないわい」

「なるほど……」

恐るべし、ど田舎！とは口に出さずに、神妙な面持ちでユリアとニーニヤは頷いてみせた。

「魔法に対抗出来る非魔法っていうと、薬師が作る薬くらいのもなのよね。それ以外だと、やっぱり魔法防御のかかっている武器や防具に頼るしかないから。だからこそ、あのフィアツマ・パグリアを手にすることが出来れば、魔法の使えない人間でも、魔導士と戦えるようになるってわけ」

「あの台座には石碑のようなものがくっついていてね。そこにこう書いてあるの。我、選ばれし者の手に。ってね」

「すごい。じゃあ、本当に、あの剣を抜くことが出来れば、勇者さまになれるのね」

感動に声を震わせて、アメリアが微笑んだ。

「さ、どうする？」

ニーニヤが、グレンを見上げて尋ねる。

「それでもあんたは、あれを抜きに行く？」

にやりと笑って、ユリアが後方の人だかりを指さした。

「えっと、何の話だっけ？」

グレンが言っていると、アメリカはたまらず兄の頭をぽかぽかと殴る。

「いてて」

「行きます！ 何があっても、行きます！！」

敏腕マネージャーよろしく、アメリカが声を上げた。

### Scene 3 : Who is GANSAKU? (後書き)

金穂の炎は、オード語でThe Flame of Golden Strawです。

つまり、オードは英語圏、ヴェランダはイタリア語圏です。

(ちなみに、strawは麦穂という意味で、飲み物を飲むストロウの語源です。

ストローは、エジプトにて不純物の多いビールを飲む際に、稲穂をストローとして使ったのが、その理由だとか。)

Scene 4 : 勇者さま、いりませんか？

こんな筈じゃなかった。

ただ、アメリカを、妹を喜ばせたかっただけ。

勇者なんて本当はどうでもいい。魔法なんて、争いなんて、戦いなんて、どうだっていい。

毎日を、同じように過ごせればいい。秋には収穫の出来を心配して、春には種まきをして。穏やかに、家族と一緒に毎日を、毎月を過ごせれば、それでいいのに。

台座に埋め込まれた剣は、確かにちよつと引つ張ったくらいでは抜けなかった。それでも、ほんの少し、腕に力を込めればそれはするすると姿を現した。じゃがいものつるの方が、余程手強い。

この剣を抜けば、アメリカの笑顔が見られると思った。だから、抜いた。 たったそれだけのこと。

なのに、何故か当のアメリカはそばにおらず、グレンが気付けば周りを取り囲んでいたのは、今まで見たこともない人間ばかり。

人だかりに飲み込まれて怪我でもしてやしないかと最愛の妹の姿を探せば、祖父と共にこちらを見つめるその愛らしいシルエット。

驚いていながら喜んで、喜んでいながら信じられないといった顔で、アメリカはグレンを見つめていた。

「アメリカ！」



叫んだけれど、その声はがやがやとした歓声に飲み込まれてしま  
う。

「おい、あんた！」

剣を手にした腕をぐいと引つ張られてそちらを振り向けば、見る  
からに戦士ファイターといったていの男。

「あんた、パーティーメンバーはいるのかい？」

「は？」

まるで縊るように触れてくる男の手を煩わしく思いながら聞き返  
すと、男はさらに詰め寄ってくる。

「だから！ あんた、旅に出るんだろう？ だったら、パーティ  
ーメンバーがいた方が何かと便利だろう？ どうだい。おれは、  
オードではちよつとは名の通った」

グレンには皆目理解の出来ない内容を口走っていた男は、しかし、  
横から伸びたふたつの腕によって思い切りよく突き飛ばされてしま  
う。

「はいはいはい、あんまり近寄らないでくれる？」

ニーニヤが片手でグレンを後ろ手に庇いながらヴェランデ語で言  
えば、

「ほらほら、こいつと喋りたいんなら、並んで並んで！」

とユリアがオード語で声を上げる。

「あんたたちの前に、こいつと話すべき人間ってのがいるんだよ」  
「アメリカちゃん？」

甘い声音でニーニヤが呼ぶと、人だかりから離れて立っていたアメリカがおずおずとこちらに近寄ってくる。自然とそこには道がつくられ、アメリカは両脇に好奇の目を感じながら兄のもとへと歩み寄った。

「お兄ちゃん……！」  
「アメリカ……！」

お兄ちゃん、やったぞ。この剣を抜けば、お兄ちゃんは勇者さまだろう？ アメリカだけの勇者さまだ。さあ、おうちに帰ろう。

感動的なスピーチになるはずだった。剣をどこかに置いてしまいたかったがそうもいかず、仕方なく片手だけをアメリカの方に差し出す。

「お兄ちゃん、寂しくなるけど、頑張ってね！」  
「ん？」

「ん？じゃないでしょ！ お兄ちゃんは、勇者さまなのよ？ 勇者さまっていうのは、世界中を旅して、困っているひとを助けに行くのよ？ うわあ、すごい、お兄ちゃんたら、本物の勇者さまになったのね！ あたしもおじいちゃんも、村の人たちだって、みんなみんな、お兄ちゃんのことを誇りに思っているからね。ちよつと寂しくなるけど、大丈夫。お兄ちゃんは、勇者さまのお仕事を頑張ってね！」

「……ん？」

差し出した手をまったく無視して、アメリアはにこにこ顔でユリアに近づく。どこか計算された躊躇いの色を見せると、口を開いた。

「ユリアさん。　ユリアさんたちって、もしかして、魔導士ですか？」

「私は風の魔導士。　ニーニャは賢者だよ」

「わあ、すごい！　では、これから、兄をよろしくお願いします」  
ぺこりと頭を下げる姿は、それだけでごはんが食べられそうなくらいの可愛さだ。　我が妹ながら、こんなに可愛くて将来どうするのだろうと、グレンは不必要な心配をする。

「え、アメリアちゃん、それって」

「お兄ちゃんって、見ての通り、ちょっと抜けてるっていうか、割と鈍感っていうか、理解力が牛並みっていうか、とにかく、あんまり渡世術に長けていないので。　ユリアさんやニーニャさんたちみたいに、しっかりとした、強い、色々と仕切ってくれそうなひとにお兄ちゃんをお任せしたいんです。　そこにいる戦士ファイターのひとなんかでは、お兄ちゃんは手に負えないと思います。　お兄ちゃんを操るには、忍耐力と行動力の両方が必要ですから！　もちろん、ユリアさんたちにも、勇者さまと一緒に旅をするってことで、色々特典はついてくると思うので、まったく悪い話でもないと思いますけど。　どうでしょう？」

「えーと」

本当に、あなた、十歳？

一番聞きたかった質問を飲み込んで、ユリアはにっこりと微笑んでみせる。　大人の余裕を見せなければと思ったとか、強いと言わ

れて単純に嬉しかったとか、そんなわけではない。もちろん、勇者と旅で得られる数々の特典を思い浮かべて、思わずガッツポーズを取りそうになどならない。

「ニーニヤ？」

視線を向ければ、ニーニヤは天使の笑顔に腹黒さを滲ませて、

「いいんじゃない？」

笑ってみせる。

「じゃあ、そういうわけだから。お兄ちゃん、ユリアさんとニ

ーニヤさんの言うことをよく聞いてね」

「……………ん？」

先程とまったく同じポーズでアメリカを迎え入れようと待機していたグレンは、頭の上にたくさんのはてなマークをくつつけてほんの少しばかり眉根を寄せた。

「お兄ちゃんは！　これから、勇者さまとして、ユリアさんとニーニヤさんと、世界中を旅するの！」

「何で？」

「だって、それが勇者さまだもの」

「でもおれは、村に帰りたい。畑のこと心配だし」

「畑は、あたしとおじいちゃんでは何とかするから」

「でも、力仕事をじいちゃんに任せるわけにもいかんだろ」

「あら。そのときは、村のひとたちに頼むもの、大丈夫よ」  
「でも」

自分の半分もない背丈の妹に人差し指をつきつけられて、グレンは目をぱちくりさせる。

「お兄ちゃん？ 剣は解き放たれてしまったの。 お兄ちゃんは、もう、勇者さまなの。 観念しなさい」

「アメリア」

「じゃあね、お兄ちゃん！ 幸運を祈っているわ」

強引に言い切ると、アメリアはつま先立ちになってグレンに近づく。 つられてグレンが身がかめれば、アメリアは頬に甲高いキスをひとつすると、スカートの裾を翻して台座から飛び降りると祖父のもとへと走り去っていく。

「アメリア？」

片手に剣を手にしたまま呆然と立ち尽くすグレンの耳には、ユリアとニーニヤによる、オード語とヴェランダ語のアナウンスは耳に入っていなかった。 勇者と旅をすれば、自ずと名声が手に入るだろうと算段していた者たちはみな、そのアナウンスを聞いてがつくりと肩を落とす。 かたわらのふたりの女性が、いわく、彼のパーティーメンバーであるらしいから。

「これ……」

ふと手のひらにある剣の重みを感じて、グレンが誰にともなく呟く。

「別に欲しくないんだけどな」

**S c e n e 5 : I s i t e d i b l e ? (前書き)**

はわわわわわわ(蒼白)

気付いたらもう9月が終わってしまっ!

こんな長い間更新しなかったのは、初めてです。すいません。

来月は、もう少し頑張りますので、見捨てないでやってください。

## Scene 5 : Is it edible?

ユリアとニーニヤが啞然としていた。開いた口はきれいな縦型の楕円形を描いていて、どうやら二人ともそうなっている己の姿に気付かないようだった。ふたりはぽかんと口を開いたまま、まばたきすら忘れて、前方に見入っている。ふと我に返ると、まばたきだけをせわしく繰り返し、それでもまだ口はそのままで隣と視線を交わすと、また前方に向き直って、今度はやや眉根を寄せてゆるゆると首を左右に振った。

その一部始終を、グレンは何の感慨もなく見つめていた。

なんで、こうなったんだっけ。

思いながらふと手をあげれば、その中にはずしりとした剣が一降り。塚を握っているのは確かに自分の手だろうに、まったくその感覚がない。刀身には血が一滴付いていて、それを振り払おうと剣を振ると、己の頬にそれは飛び移る。

これが、勇者？

「ちょっと、ちょっとお！」

ニーニヤがぱたぱたという擬音語が似合う走り方で、こちらに駆け寄ってくる。後方からは、ゆったりと女豹のそれで歩むユリアの姿。

グレンのもとへ辿り着いたニーニヤは喜色を露わに、両手を大きく左右に広げて見せた。

「すっごいじゃない!」

「なにが?」

「これ! 聞いてないよ、グレンがこんなに強いなんてさ」

「強い? おれが?」

「そうだよ。めちくち強いじゃん、あたし、びっくり。どこで習ったの?」

「なにが?」

「戦闘の仕方。あたしたちは、一応魔法学校を出てるんだけどね。そこで、たまあに親善試合とかあっていつて、剣士とか戦士とかと模擬試合をしたことあるの。でも、グレンみたいに強いひと、いなかったよ! まじでびっくりだよ。ねえ、ユリア?」

興奮した調子でニーニヤが振り返ると、すぐそばまで来ていたユリアが微笑んで軽く頷く。

「賞賛に値する。グレン」

賞賛、の意味を考えながらグレンが曖昧に笑みを返すと、少女たちはやおら安堵した顔つきになった。

「思わぬ拾いものだったよね。それに、てっきりあたしたちのことを恨んでるかと思ったら、そうでもないみたいだし」

「確かになあ、初めはこの田舎者かと思ったから。妹と離れた直後は廃人みたいになっていて、それこそ、何の役に立つのかも分からなかったしなあ」

「そうそう。アメリカちゃんが頼まなかったら、こんなどんくさそうなの、面倒見るわけじゃないじゃない?」

「そうだな、アメリカちゃんは、確かに、可愛かったな……」

「あ、ユリア、顔が赤いよ? さては、結構好みだったんだな?」



「いやあ、そういうわけでは！　ただ、純粹に、可愛かったなあという話だ」

「はいはい、ま、どっちでもいいけど。　とにかくさ、グレンは想像以上に強いし、ちゃんと戦闘でも役に立ってことが分かったし」

「うむ、それに金穂ファイアツマ・バグリアの炎の威力は想定していた以上だったな」

「ほんと、ほんと。　どのぱっちもんかと思ってたけど、ちゃんと使えるもんだね。　あんなアンティークソード、料理に使うくらいしか使い道はないかと思ってたもん！」

「いや、私はそこまでは思っていないが……」

という会話はすべてヴェランド語で行われており、すなわち、グレンにはハエの羽音と同じようなものにしか聞こえなかった。　アメリカという単語が聞こえたのも、きつと気のせいだろう。

アメリカ。　兄ちゃん、勇者なんてやめたいぞ。　全然、楽しくない。

死屍累々と横たわるモンスターを眺めて、はあ、と切なげにため息をつく。

こんなモンスターたち倒したって、全然楽しくない。　森で狩猟をしていた方がよっぽど楽しかった。　獲物だって、もっとすばしっこかったし。　それに、こんなモンスター倒したって、どうせ食べられるわけじゃないんだろう？　だったら、何のために倒したんだか。　あのふたりが、ユリアとかいうのと、ニーヤとかいうのが、モンスターを倒せるかって聞いてきたから倒しただけだ。　なあ、アメリカ。　これが勇者か？　兄ちゃんは、勇者はあんまり好きじゃないぞ……。

「なあ」

グレンが初めて、ユリアとニーニヤに話しかけた。ここまでの道のりにおいて、アメリカを失ったショックから立ち直れなかったグレンはいつも意気消沈していて、それに少なからずの罪悪感を感じるふたりが必死に話しかけるといふ構図だったから。

驚いた顔を隠すひまもなく、ニーニヤが応える。

「な、なあに？」

精一杯可愛らしく笑ってみせる。それが徒労に過ぎないことは分かっている、だ。この重度のシスコン田舎男は、本気で妹以外の女性に魅力を感じないらしい。

「これ、食べれる？」

「これって……？」

訝しげに眉根を寄せて、グレンが剣先で指したものを見ようとユリアが上半身を傾ける。

「だ、だめだめだめだめ！」

ユリアよりも視力の良いニーニヤが、いち早く大きなリアクションを返すと、グレンは諦めにも似た嘆息をつく。

「やっぱりな。だったら、何のために倒すんだ？ 食べられないんじゃないか、意味ないじゃないか」

息絶えたモンスターの皮膚を、剣でつんつんとしながらグレンが言う。慌ててユリアは両手を胸の前に広げ、制止をはかりながら、

可能なかぎり優しい笑みを浮かべてみせた。

「いや、あの。よ、よく聞け、グレン。お前が倒したのは、モンスターだ。どこの世界に、モンスターを食す勇者がいるっていうんだ？」

「じゃあ、勇者はモンスターは食べないのか」

「というよりも、勇者でなくても、モンスターは食べないと思うがな」

「じゃあ、やっぱり、無駄だ」

無駄死にだよなあ、と独りごちて、グレンは血糊を払った剣を鞘に収めた。宝石による魔力測定をしたこともなければ、モンスターだの勇者だのという意味を考えたこともない、そのくせ、農業で培った体力と大自然の中で暮らしてきたが故に身についている天性の戦闘感覚を持ったグレンは、いわゆるエリートコースを進んできたユリアとニーニャにとって、まったく得体の知れないものだった。

「なあ」

「な、なんだ？」

「おれは、いつ勇者をやめてもいいんだ？」

「うわ、しょっぱなから消極的だね、グレンたら。一応、勇者っていったら永久就職だからねえ」

「どういう意味だ？」

「簡単に言つと、一度勇者になった者は、死ぬまで勇者だということだ。男に生まれれば、死ぬまで男であるようにな」

分かり易いユリアの説明に、グレンが顔を青ざめさせる。

「死ぬまで……？」

「ど、どうしたの、グレン？」

わなわなと震えるグレンに怯えて、ニーニヤがユリアの陰に隠れる。

「それじゃあ、死ぬまでアメリカに会えないってことか……？　だ  
ったらいつそ今死んじゃった方が……！」

思い切りよく剣を鞘から引き抜くグレンに、ニーニヤがタツクルを  
かましながら喚いた。　ぴょんと身軽に飛ぶと、グレンの背中に飛  
び乗る。　両脚で上半身を羽交い締めにして、その隙に、ユリアが  
手際よく剣をグレンの手からもぎ取った。

「わーわーわー！　ちよつと待って〜！　早まらないでってばあ！  
グレンの面倒はちゃんと看るからって、アメリカちゃんとも約束  
したんだから。　こんな序盤で勇者自害なんてエンディング迎えち  
やったら、あたしとユリアがアメリカちゃんに血祭りにあげられち  
やうから！」

「アメリカ……」

ヘーゼルの瞳に大粒の涙を浮かべて、グレンはえぐえぐと泣き始め  
る。　大きな体を丸めてしゃがみ込む姿は、大型犬のそれを彷彿と  
させて、ふたりの少女はため息をつきつつも苦笑した。　ユリアの  
手にした剣は、それだけで手首が折れてしまいそうなほどに重くて、  
今更ながら、グレンの怪力に驚く。

「じゃあ、こうしようよ、グレン」

人差し指を立てて、ニーニヤが微笑んだ。　地面に座り込んでしま  
ったグレンと目線を合わせようとかがみ込むような姿勢になると、  
パニエでふくらんだスカートから太ももが際どいところまで見えて  
しまう。　誰もいないと知りつつ、片方の手でスカートを押さえな

がらニーニヤは言った。

「勇者つてのはさ、まあ、色々と面倒臭い仕事もたくさんあるわけでも、その根っこの部分つてのはシンプルだから。つまり、人助けをたくさんしろってことなの。だからさ。どかんと一発、大きな人助けをして、世界中のひとにグレンが勇者だつてことを知らせてしまえばいいんじゃないかな。それならさ、アメリカちゃんだつて、グレンのことを喜んで迎えてくれるはずだよ」

「ほんとに……？」

への字口のまま、グレンがうるうると光る瞳でニーニヤを見上げる。意外に可愛いその仕草に、不覚にも一瞬ときめいてしまつてから、慌ててニーニヤは傍らにいるユリアと目を合わせた。こくりと頷くユリアを確認してから、ニーニヤがアイドルスマイルを浮かべる。

「ほんとに。　ね？　だから、もうちょっと、頑張ろう？」

「……わかった」

「よし。　決まりだな」

ユリアが言つて、立ち上がったグレンに剣を渡す。　塚を手にして刀身を見つめると、グレンは旅が始まつてからようやく、素直な微笑みを顔に浮かべた。

「ユリア。　ニーニヤ」

「ん？」

「何だ？」

「よろしく」

差し出された手は、今まで知り合つた誰よりも大きく、厚く、そし

て純朴な匂いがした。少し照れ臭そうにそれに手を重ねると、ふたりの少女は声を揃えて、

「よろしくね、グレン」

「よろしくな、グレン」

「うん」

麦穂のようなブロンドを揺らしてグレンが微笑み返す。

「あ。あれ、一応持つて行くか？」

「あれ？」

「モンスター。食べられるかもしれないから」

「いい、いい、いいよ、グレン！ 食べないから！ よしんば食べられたとしても、食べないから！」

「そうか……？ もつたいないなあ」

名残惜しそうに言って、グレンが手を引っ張られて、モンスターの残骸が散乱した地を後にする。

アメリカ。兄ちゃん、頑張ってみるな。早く会えるように。

早く、アメリカに会えるようにさ。

S c e n e 6 : 拝啓、兄上さま（前書き）

またしてもものすーごく時間が空いてしまいました。  
申し訳ないです……。

今回の、A c t 1は終わりです。次はI n t e r m e z z oかな。

## Scene 6 : 拝啓、兄上さま

アメリカ。 兄ちゃん、頑張ってみるな。 早く会えるように。 早く、アメリカに会えるようにさ。

と誓いを立ててから早二ヶ月。 デイグオスでの生活の方が余程単調だったというのに、アメリカの元を離れてからの日々は、毎日が長く、グレンはすでに疲れ切っていた。

人助けをすると簡単に言ったものの、そうそう助けを必要としている人物にはお目にかかれず。 いや、実際には、グレンの純朴さに惹かれて近付いてくる老人たちはたくさんいたのだが、名の通った人物に関わらないと出世出来ないというユリアと、旅を続けるためにはとにかく先立つものが必要だからと言うニーニヤのせいで、グレンはことごとくそうした老人たちに頭を下げ続ける羽目になっていた。

「そんな都合良く、有名でお金持ちなひと、いるのかなあ」

もつともなことを呟いて、はあと切ない吐息を漏らす。 それからまた目尻にじゅわつと涙を滲ませて、手にした山羊のミルクに映る自分の顔をしばし見つめた。

「アメリカ……。 何でこんななっちゃったんだろうな。 お兄ちゃん、早く帰りたいよ」

わつと突っ伏すその姿を、半円型で囲むように眺めていた食堂の野次馬たちは、しかし、突風の勢いで入ってきたふたりの少女の姿を



認めてさつと離散する。この泣いてばかりいる、独り言の異様に多い青年がダラムにやってきて三日。彼が、どうやら旅をしていることと、その仲間がふたりの少女であることを、食堂の常連は知っていたから。

「グレン！」

ユリアが凜々しくも艶やかな声音で呼びかける。スリットの大きく入ったスカートを身に纏った彼女は、歩く度にその脚線美を惜しむことなく見せつけていて、食堂の青年たちの視線を独り占めしていた。

「うわ、まあた泣いてるのお？」

舌ったずらに言つて、ニーニヤがふんわりとふくらんだスカートをひらひらさせながらユリアの後につく。ニーハイから上の、通称「絶対領域」と呼ばれる皮膚はヴェランデ人にしては白く、食堂の中年男性たちの目尻を下げる効果をいかに発揮していた。

「だって……」

情けない様相で言うグレンを哀れむように見るユリアと、少し蔑んだように見つめるニーニヤ。勇者がこれでは、男がめそめそしていても、愛しのアメリカに申し訳がたたないと、グレンは勇気を奮い起こして涙を無骨な指で拭き取ると、少女たちに向き直る。

「グレン。時に聞くが」

妖艶な瞳をすうと細めてユリアが尋ねる。

「お前、文字は読めるのか？」  
「ううん」

さらりと首を振るグレンを見やって、ふたりの少女は背中の後ろで  
がっちりと手を組んだ。己の勝利を確信するがごとく。

「なんで？」

当然の質問を投げかけるグレンの瞳は天使のように透き通っていて、  
少しばかりニーニヤの良心を責め立てたが、それも一瞬のこと。  
につこりと聖女の微笑みを浮かべてみせると、じゃーんという擬音  
語と共に一通の封筒を見せた。

「……………」

まったくの無反応がニーニヤに浴びせかけられ、気まずい沈黙が三  
人を覆う。

「グレン！ 何か言ってよ！」

「たとえば？」

「た、例えば、えっと、何それ？とか。誰から？とかさ。何で  
も良いから！ もったいぶって見せてるあたしが恥ずかしいじゃな  
い。ギャグを外した芸人みたいな境地に追い込まないでよねー」

「げいにん？ 誰？」

「グレン、ポイントはそこじゃないぞ。これだ。分かるか？  
手紙だ」

「てがみ？ 何それ」

「そうそう、そういうリアクションが、って……。ええええ、ち  
よっと待ってよ、グレン。もしかして、手紙の存在自体を知らな  
いの？」

大袈裟に驚いてみせると、手にかざした封筒をひらひらと左右に振ってみせる。犬や猫がそうするように、グレンは封筒の動く様を目で追いながら、

「だから、てがみつて？」

「手紙というのはだな。文字によるコミュニケーション手段だ。紙媒体のものに文字を書き連ねる。それを郵便屋というところに持って行くと、それが配達される」

「どこに？」

「その手紙を渡したい相手にだ」

「何で自分で渡しに行かないんだ？」

「距離が遠すぎて会えないとか、まあ理由は様々だろうよ」

「おれとアメリカみたいに？」

「グッド指摘！ そう、そうなのよ、グレン！ 実はね、この手紙、アメリカちゃんからなの」

コケティッシュなウィンクを飛ばすも、グレンはいまいち状況を把握出来ずに首を傾げるばかりだった。だが数秒考え込んだ後、勢い良く椅子から立ち上がる。大柄なグレンは、その動作だけでユリアとニーニャに威圧感を与える。熊に立ち会った農民の気持ちを、ふたりは瞬時に理解した。

「アメリカから！？」

「そうそう、そうなのよ。中身、読んでみたい？」

そもそも、文字の読み書きはグレンも習っていたはずなのだが、その能力を使うことに意味を見いだせなかったグレンは、何の躊躇もなくその能力を忘却の彼方に押しやってしまったらしい。そのことすらも覚えていない彼には、封筒に書かれた文字がアメリカの筆

跡とは異なることも、手紙にしては消印が押されていないことなどにも、もちろん気付けるはずがなく、ニーニヤの問いにこくこくこくこくと小刻みに首を振って応えるばかり。

「じゃー仕様がないなあ。 グレンが文字を読めないっていうんじゃ仕方ないよね。 親切なあたしが、代わりに読んであげるね」

こほん、と小さな咳払いをすると、ニーニヤはおもむろに封筒の中から数枚の紙を取り出し、読み上げ始める。

「グレンお兄ちゃんへ。 お兄ちゃん、お元気ですか。 お兄ちゃんが村を出て、立派な勇者さまとして名を上げるための旅へ出てからもう二ヶ月が経ちますね。 ユリアさんもニーニヤさんも、きれいで可愛くて、優しく強い冒険者さんたちなので、きつとお兄ちゃんもふたりと仲良くやっていることと思います。 お兄ちゃんはふたりと旅が出来て幸せだと思います。 私は、元気に暮らしています。 おじいちゃんも、元気だよ。 お兄ちゃんがいなくなったら、この家は、少し寂しいけれど、私は負けたりしません。 だって、お兄ちゃんも頑張っているんだもんね！ お兄ちゃんは、私のお兄ちゃんだから、きつとどこに行っても大活躍でしょうね。 困っているお金持ちのひとを助けたり、賞金のかけられている悪いひとを捕まえたりして、いっぱい色んなひとから感謝されてお金をもらったりしているんでしょう。 そのうち、お兄ちゃんなら、色んなところから声をかけてもらえるくらい有名になって、お兄ちゃんを雇うだけでたくさんのものが貰えるようになって、そうしたら、お兄ちゃんは勇者さまとして、ユリアさんとニーニヤさんに、その半分を渡したら良いと思います。 とにかく、お兄ちゃん。 お兄ちゃんは今も、勇者さまなんだから。 たくさんモンスターを倒して、たくさんのお金持ちを助けて、たくさん有名になって、たくさんお金を稼いでください。 私は、いつもお兄ちゃんのことを考えてい

ます。 お兄ちゃんのアメリアより」

「アメリア……！」

ぼとぼと涙をこぼしながら、グレンが仁王立ちになって感極まった声をあげる。

ぐるりと勢い良く反転して、テーブルの上のコップを掴み、残っていたミルクを一気に飲み干すと、

「よっしゃあああああ」

と、無駄に暑苦しいかけ声をかける。それから、ヘーゼルの瞳に燃えたぎる炎をちらつかせて、そのがっしりとした腕でユリアとニーヤの肩に手をかけた。

「ユリア。 ニーニヤ」

「は、はい……」

そのあまりの情熱絵的な瞳に思わず、すくみあがってしまうふたりである。

「お金持ちを捜しに行こう！」

完全に手紙の内容を意識し間違えたグレンは、声高らかにそう宣言すると、

「うおりゃあああああ」

などと雄叫びをあげて、盲目的に食堂を飛び出していく。 行き先は、もちろん本人にも分かっていない。

「ニーニヤ」

「なに、ユリア」

食堂の野次馬たちが、闘牛のごとき疾走をみせるグレンの背中を眺めていたとき、その場に残された少女たちは小さくヴェランデ語で言葉を交わし合う。

「あの手紙が、お前の書いたものだということは」

「死んでも言わないって」

「よし。……しかし」

「うん。まさか、あんなに効果が出るとはね」

ちらりと視線を交わすと、にやりといたずらっぽく笑い合う。二

ーニヤが手にした封筒をユリアに差し出すと、

「フォーコ  
火炎」

封筒の角に突如として現れた炎は、見る見るうちに広がっていき、封筒も手紙も、黒炭となって風にさらわれていく。それが消え去るのを見届けると、ふたりは、パン！と乾いた音をたてて手のひらを合わせた。

「じゃあ、いっちょ、お金持ちを探しに行きますか」

「だな」

Intermezzo : 眠れるお城のめそめそお嬢さん

「どうしよう」

その声に答えてくれる者などいないというのに、それでも、そう  
呟かすにはおられない。

自分のしでかしたこの惨劇の意味を、少女はきちんと理解してい  
たから。

自分のような、生きているのがおこがましい生き物が、まだおめ  
おめと生き恥をさらしているというのに。それを享受してくれて  
いた者たちに対して、こんなやり方でしてか、自分は応えられない  
のかと思うと、目眩がするほど齒痒く、涙の根も乾いてしまうほど  
に情けなかった。

「ちがうの」

顔を両手で覆っても、目をきつく閉じても、まぶたの裏には己の  
所業がはつきりと浮かび上がる。所詮、自分の罪から逃げるこ  
となど、不可能なのだ。

「ちがうの」

いやいやをするように首を左右に振ると、銀髪が窓からの光を反  
射させて万華鏡のように輝く。その美しさを認めてくれる者は、  
もういない。乾ききったと思われた涙が、またしても頬を濡らす  
その様を見る者は、もういない。

もう、誰もいないのだ。

「どうして……」

誰を憎めば良いのだろうか？ 自分以外に、誰を責め立てれば良いのだろうか？ 己の命を絶つことすらも許されない、この憎らしい体で、これからどうやって生きていけば良いのだろうか？ もし、この世に神などが存在するのなら、どうやってこの苦しみを伝えれば良いのだろうか？

「だれか……」

濡れた頬をあげて、視線を胡乱に窓の外へと向ける。

外界に。

「わたしを、殺して……」

震える声で言ってから、かたわらのベッドへと目をやった。

「……ッ……クス……」

呼びかける声は、しんと降り積もる沈黙の中へと消えて行き、少女はまた、後悔の涙をこぼす。

それを拭き取ってくれた指のあたたかさを思い出しながら。

そして、それがもう二度と手に入らない絶望を、骨の奥まで感じ取りながら。



ACT II ; Scene I : テディ・ベアの暴走

ニーニヤが書いたとは知らずに、愛する妹アメリカからの手紙の内容に号泣し、尚かつ大変に感動したグレンは、燃えたぎるような使命感に包まれていた。

何かをせねばならない。勇者として、何かを。

その思いは、腰にした名剣『ファイアツマ・バグリア金穂の炎』が放つ炎のほむらのように猛々しく、グレンの少し足りない頭脳のように若々しい熱情は、彼を無目的に走らせた。

「うつうつうつおおおおおおうつうつうつ」

そこいらを通りすぎるひとたちが、一様にぎよつとして目を見開くにも全く気付かず、グレンはただただ、ひたすらに走った。真つ直ぐに走り続けようとして、そうそう、真つ直ぐの道路ばかりでない事実には直面すると、突き当たりにぶつかるたびに、またしても無目的に右に左に道が伸びる方へと走った。お世辞にも頭脳的とは言えないその戦略はもちろん、ただでさえ、アメリカに会えないと意気消沈して街の構造を把握していなかったグレンを混乱させる。しかして、急に止まることも出来ない、グレンはそのまま、体力の持つ限り走り続けることにした。

その体力が、常人からは、遠くかけ離れていることなど、露にも知らず。

「もう、最低だよ」

薄い口唇を突き出して、頬をピンクに染めたニーニヤが文句を垂れた。

「仕方ないだろう」

額にうつすらと滲んできた汗を、手の甲でぬぐってから、ユリアが肩をすくめる。

「普通さあ、走り去る？ 街の構造も知らないのに？ 妹から手紙が来ただけで？ 勇者さまだからって？ 走って、迷って、何で止まらないの？ 何で、あたしたちを探そうとしないの？ それともなに、あたしたちなんて必要ないと思ってるの？ もう、最悪だよ。 あんな、単細胞で扱いづらい奴、あの剣がなかったらとうの昔に路上に廃棄してるつつうのつ。 しかも、勇者勇者って言っけどさ、ぶっちゃけ、勇者の意味なんて知らないでしょ、あいつ。 ああん、腹がたつうー！」

肩で息をしつつも、両手を握りしめ、きくくと小動物のような声を上げながら地団駄を踏む。

すでに辺りはうつすらと暗くなってきたので、幸い、ひとりコントを始めてしまった少女に、人々の視線が向くことはなかった。相棒の喜怒哀楽の激しいことには慣れっこのユリアは、何となく首の後ろに手をやって、ぐるりと周りを見渡してみる。

「帰巢本能みたいなものは、ないんだろうか」

「え？ きそ、なんだって？」

「帰巢本能。例えば、飼い犬が間違つて外に飛び出して行ってしまうても、そのうち家に帰ってくるだろう？ あれのことだ」  
「グレンに、帰巢本能があるかって？」

ジト目で半笑いを浮かべるニーニヤに、苦笑しながらも頷いてみせると、

「そんなもの、原始人のプロトタイプみたいなグレンにあるわけじゃないじゃない！ せいぜい帰るんだとしたら、アメリカちゃんぢやないの？ グレンなら、アメリカちゃんの匂いがするーとか言つて、どんな長距離でも走つて帰っちゃいそうだよな」

確かに、とユリアが相槌を打つて、ふたりは爽やかにグレンのことを馬鹿にする。軽やかな笑い声を上げていたが、ふと、ふたり同時にあることに思い当たつて、その表情を強張らせた。

「今、帰られたら……」

こくり、と喉を鳴らしてユリアが言う。

「絶対、二度とアメリカちゃんから離れない……」

絶望的に目を瞞るニーニヤが言えば、

「勇者なしの旅……」

と、ユリア。

「名声……」

「プロモーション……」

「スポンサー……」

「コネクション……」

「お金……」

狸親父が悪徳政治家のような単語を連ねて、少女たちは顔面蒼白になると、強い決意を持ってお互いを見つめ合い、頷き合った。

「グレンー！」

「グレン、どこだー」

「グレンやーい。ほーら、グレンの好きな山羊のミルクだよー」

「ニーニヤ、それはちよつと……」

「え、何で？ だって、いつも飲んでるじゃん、山羊のミルク」

「いや、そういうことじゃなくて……」

少女たちの姿は、次第に夕闇の中に消えていった。

食堂から飛び出してから、きっかり三時間後。 とつぷりと暮れてしまった街並みは、ところどころに灯ったランプ以外の灯りは見えず、行き交う人の数もまばらなくなっていた。

明らかなるアドレナリン過多で、体力を消耗する以外にその発散方法を見つけられなかったらしいグレンは、しかし、ぴたりとその足を止めた。

うつすらと汗が滲んでいるものの、息はまったくといって良い程あがっておらず。 ディグオス村の中でも驚異的というよりも脅威的な体力を誇るグレンの無尽蔵なエネルギーは、最早モンスターと同レベルである。

「うん？」

小首を傾げれば、さらりと髪が流れる。その仕草には、通行人を微笑ませるような何かがあつて、何人かはくすくすと微笑を洩らした。

本人は、まったくそのような事態を飲み込んでおらず、ただ壁の一点を食い入るように見つめている。

「……………」

真剣な眼差しで見つめるその姿からは、まさか、頭脳レベルが稚児並であることなど微塵も感じさせず、客観的に見つめても、意外と様になっていた。

背後からの跳び蹴りが、電光石火の勢いで命中するまでは。

「ぐえっ」

変声期中の蛙のような声を上げてグレンが前につんのめる。かろうじて壁にキスするのを防ぐと、ぱりぱりと後ろ頭を搔きながら振り向いた。

頬を真っ赤にした、自分よりも随分と小さいツインテールの少女が、烈火の如くグレンに怒鳴り散らしてきた。少女のやや後ろには、膝を折り曲げ、その上に両腕を置いて、はあはあと荒い息を繰り返す、褐色の肌の少女の姿も見える。

「この、馬鹿！ 単細胞！ 抜け作！ とんま！ 役立たず！」

「あ、ニーニヤ」

「あ、ニーニヤ。じゃ、な〜〜いつ！ あのねえ、グレン、あたしたちがどれだけの間、あんたを探していたと思ってるのよ！

「？」

「……さあ？」

「きいいいっつっ！　むかつく！　むっかつくわ！　その言い方！　まるでそんなの気にしてませんでしたよ、みたいな言い方。むしろ、おれ別に悪いことしてないじゃん？　何そんな怒ってんの、ニーニヤ？　老化が早まるよ？　みたいな言い方っ！」

「あ、ユリアだ」

「ひとの話を聞きなさいよう！」

むきーっつと怒髪天を衝いたニーニヤは、力任せにぽかぽかとグレンの胸を叩くが、異様に堅いそれはびくともしない。あろうことか、叩いているニーニヤの拳がじんと痺れてきた。豆腐かすがいに鎚を打ち込む虚しさを味わったニーニヤは、悔し紛れにグレンのすねを自身のブーツの一番堅いところで蹴ってみせる。

「どうしたんだ、ニーニヤ？　欲求不満か？」

「ああもう、グレンは喋らないで！　グレンの口から、欲求不満とかって言葉を聞くと、何故だか無性に腹が立つからっ」

「そういうときには、あつためた山羊のミルクを飲むと落ち着くぞ。　アメリカが眠れないときなんか、よく作ってやったりしたもんだ」

視線だけでひとを殺められるのではないかというほどの苛立ちを募らせて、ニーニヤの瞳が暗闇の中、ぎらりと光った。息を整えるのに必死だったユリアは、ニーニヤの暴走を恐れて、素早くふたりの間に入り込む。

「話の腰を折ってすまんが、グレン」

「ん？」

にこにこと笑ったままのグレンは、幼い少女が抱えるデディベアを彷彿とさせて、ユリアは心中でそつと息をついた。悪いやつではないのだが。

「どうやら、何かを見ていたようだが……。何か気になるものでも見つけたのか」

どーせ、シスコン単細胞が見つけたものでしょ、虫とかじゃないの？　ったく、世話かけさせないでよね、と完全にへそを曲げてしまったニーヤが毒づくが、グレンはその笑顔を崩すことなく、背後の壁を指さした。

「これ」

「ん？　どれどれ」

グレンの体で遮られているため、ユリアの位置からは何も見えな  
い。疲労困憊しきつた脚を動かして、彼の背後の壁に近付く。

そこには、ポスターのようなものが一枚、貼ってあった。紙の状態からして、まだ新しい。万年筆で書いたようだが、インクの滲みがところどころにあつて、印象としては乱雑である。

「助けて、って書いてあるんじゃないのか？　これ」

「ええと……」

グレンほどの野性味溢れる視力を持っていないユリアは、暗がりの中、もっとはっきりと判別しようと更に数歩近付いた。

「何て書いてあるの、ユリアー？」

ポスターには何か絵のようなものが中心に書かれている。長くま

っすぐに伸びた髪を持った、どうやら幼い子供のような顔。襟元しかそこには含まれていないが、そのレースのようなものが幾重にも重ねられていることから、そこそこの身分の者だと思われる。そして、その絵の下に、滲んだインクでこう書いてあった。

『アレックスを、助けて』

さっと顔色を変えてユリアが振り返る。

「ニーニヤ。仕事かもしれん。グレン、よくやった」



ACT II ; Scene I : テディ・ベアの暴走(後書き)

さあ、やっと話が動き始めてきましたね！

ブログを始めました。裏話などもしっていく予定です、よろしかったら遊びにきてください。<http://sanjyo.exblog.jp/>

## Scene 2 : 腹が減ってはなんとやら

「ニーニヤ。 仕事かもしれん。 グレン、よくやった」

「え、嘘。 それって、もしかして、当たりってこと？」

真剣な表情のユリアを見て、ニーニヤが少し狼狽えたようにグレンとユリアを交互に見つめた。 一度、同意するように頷いてから、ユリアがポスターを壁から外す。 手紙用の上等の紙であるそれには、うつすらと押し印が透けて見えた。

「あれ？ ちょっと待って？ グレンさあ、文字読めないって言うてたよね？」

「うん。 読めないぞ」

「じゃあ、何でこれの言ってることが分かったの？ おかしくない？」

手にしたポスターを調べていたユリアが顔を上げると、ニーニヤがグレンに詰めかけるように顔を寄せているところだった。 しばしの間、グレンはきょとんとした顔つきで、それから、いとも自然に、

「なんとなく」

と言った。 思わず、ユリアとニーニヤが、がくりと肩を落とす。

「ともかくだ。 この、アレックスという少女について、調べないとな」

「だね」

気を取り直して提案するユリアに、ニーニヤが顔を綻ばせる。

「調べるって?」

「グレン」。アレックスなんて名前の女の子が、この世に何人いると思ってるの?」

「さあ」

「いっぱいいるの!」

「だから?」

「だからっ! ああ、あんたと話していると、ストレスが溜まるっ!」

「まあまあ、ニーニヤ。グレンは、人捜しもクエストもしたことはないんだろうから。な? グレン。このアレックスという少女が、どこの誰なのかを判別するためにも、調査を始めないといけないんだ」

「なんで?」

「でなきゃ、見つけれないだろう」

「ふーん」

「ふーんって……。グレン、お前、どうやって探すつもりだったんだ?」

「村長に話しに行く」

「ここは街だ。村長はいない」

「じゃあ、街の偉いひと」

「それで、その偉いひとに会って、どうするつもりだ」

「アレックスってこが、迷子になってませんか?」

「グレン……。お前、このこが迷子になっていると思っているのか?」

「うん。普通、女の子は夕暮れ前には、家に戻ってる筈だからなあ。アメリカなんて、太陽が少しでも翳ったら、おれが飛んで迎えに行ってたぞ」

「うん……。そうだな……」

自分たちの常識が全く通じないグレンとの会話に疲労感を覚えて、

ユリアはあくまで優しく、それでもげっそりとした顔つきで、曖昧に相槌を打った。ほら、ストレス溜まるでしょ？と、ニーニヤが頭痛を訴えるユリアを介抱する。

「ともかくだ。聞き込みを始める前に」

眉根を寄せてこめかみを押さえるユリアの姿は、憂える未亡人のようだったが、朴念仁のグレンには何の効果も与えられず、ニーニヤにいたっては両手を挙げて、

「ごはん！ とりあえず、ごはんにしようよう。あたし、おなかぺっこぺこ」  
と叫ぶ始末。

「お前らな……」

呟いたユリアの声には、はつきりとした苛立ちが込められていた。

「お、兄ちゃんのお帰りだ」

グレンが食堂に足を踏み入れるなり、活気溢れる中食事を楽しんでいた中年の男性たちが笑顔を向けた。三日間の独り言と一人芝居で、すっかり有名になったものらしい。つられたように彼が笑いかけると、男性たちはこぞってグレンの傍に寄ってくる。

「三日泣いていたかと思ったら、急に叫んで走り出すんだもんなあ。頭大丈夫かい、兄ちゃん？」

リーダー格の男が言ってから、己の発言に気を良くしてげらげらと笑い声を上げると、周りもそれに同調する。皮肉の定義を知らないであろうグレンは、首を傾げて男を見つめて、

「そういうおっさんこそ、頭寒くないのか？　これから、だんだんと冷え込んでくるから、その頭じゃ辛いだろう？」

邪気のない顔つきで、男の薄くなった頭頂部を指さした。アルコールだけではない赤に頬を染めて、男が目つきを悪くする。男が口を開きかけた瞬間、ニーニヤが高い声で割り込んできた。

「あああああ、もう、おなかぺっこぺこ。グレン、早く注文しちやおうよう。あたしとユリアで席取りしてるから、グレンは何か適当に頼んできて。はい、これ、お金ね。全部渡しちや駄目だよ、ちゃんと、言われた金額分だけ渡してね。これ以上の値段になることはないんだから、あんまり高い値段を言われたら、黙って睨み返すのよ？　分かった？」

過去に、足元を見られて、渡した現金すべてを持って行かれたことのあるニーニヤは、くどくどとお金に関するうんちくを垂れながら、グレンをカウンターの方へと押しやった。気を殺がれた形の男は、腹いせとばかりにジョッキに残っていたアルコールを喉へと流し込む。ちらりとニーニヤを斜めに見ながら、鎖骨の浮いた白い肌から続くけしからん胸と膨らんだスカートに口元を緩ませた。

「ねえ、おじさん」

「な、なんだよ」

急にこちらに目を向けたニーニヤに、男は驚いたように肩をびくりとさせる。そんなことはお構いなしに、ユリアが先程のポスターを広げて見せた。

「この少女に、見覚えはないか？」

「ああん？」

「アレックスっていう女の子みたいんだけど、知らない？」

テレンシア領は、割と裕福なところなので、必然的に人口も増える。それら全てをしらみつぶしに探したのでは埒があかないと、少女たちは聞き込みを開始した。子供の落書きのような絵ではあるものの、その身なりが良いことと、書かれた紙そのものが上等なことから、アレックスという名の少女は、それなりの身分であることをふたりは想像していた。相手が有名であれば、一般の市民にも、その名は知られているかもしれない。この食堂で有力な情報 that 得られるなどと、虫の良い話だけを考えていたわけではないが、ものは試しにと、ふたりは外交用の笑顔を張り付けた。

「何だ、こりゃ」

「子供の落書きか？」

「しっかし、へたくそだなあ。うちの息子の方が上手く描けらあ」

「けつ。そういうのを、親ばかって言うんだよ」

「なんだと、お前こそ、何かついていやあ、娘の話ばかりじゃねえか」

片手にジョッキを持ったまま、男たちはポスターに目を向けるが、すぐに話が脱線してしまう。こめかみをぴくぴくさせながら、ニヤが猫なで声を出す。

「あのおー、このこのことなんですけど」

「これ、何て書いてあるんだ？ インクが滲んで良く見えねえが」

リーダー格の男が、文字の書いてある場所を指す。たしかに、初めユリアが手にしたときよりもインクの滲みは激しくなっていて、文字はかるうじて読み取れる程度になってしまっていた。

「アレックスを助けて、と書いてあるように見受けられたのだが」

遠慮がちにユリアが口を出すと、一斉に男たちが彼女を見つめる。その驚いたような視線にさらされて、ユリアが眉根を寄せた。鼻の大きな男が言う。

「アレックスって言ったかい、お嬢ちゃん」

「あ、ああ」

「助けるって？」

「ああ、確かにそう書いてあった」

「その似顔絵……。真っ直ぐの長い髪に、大きな瞳……」

やおら黙ってしまう男たちを不審げに見つめるユリアと、一向に進展しない状況と一向に運ばれてこない食事に苛立ちを隠せないニーニャ。しびれを切らしたのは、空腹という一大事に直面しているニーニャだった。

「何なのよう！ 知ってることがあるんだったら、さっさと言うてよね」

「嬢ちゃん」

労働階級特有の、がさがさとして節くれ立った指が、ニーニャの肩におかれる。一瞬、たじろいだ彼女に、男がやや怪訝に口を開く。

「こりゃあ、アレックス・テレンシアだ」

「へ？」

「テレンシア公爵様とこの、跡継ぎっこだよ」

「え、ええええええええ？」

空腹による力不足のために、いまいちの音量でしか叫べなかったのが、ニーニヤにとっては不服だったが、相棒の金切り声を聞かずに済んだユリアは、そつと安堵の息を漏らしたのであった。



### Scene 3 : アレックス・テレンシア

「え？」

「うわあ、もしかして、今の全部聞いてなかったとか？」

ヘーゼルの瞳がまばたきを繰り返すのを見て、ニーニヤが心底馬鹿にしたように声を上げる。　ユリアは、長い髪を揺らして、がくりと項垂れた。

「じゃあさ、グレンは今の今まで、何を考えていたわけ」

この毛虫、気持ち悪いねと同レベルの表情で、ニーニヤが尋ねる。

「アメリカ、元気かなとか。　アメリカ、今日の夕飯は何食べたんだろうとか。　アメリカのごはんは、小さいこの作るには美味かったとか。　さすがアメリカだなとか。　アメリカは将来有望だなとか。　だけど、アメリカは誰にも渡さないぞ、とか。　アメリカを狙う男どもは、おれが片っ端から片付けていかないとなあとか。　アメリカに手でも触れたら、公開処刑だな、とか」

「つまり、アメリカちゃんのことしか考えていなかったんだな」

「しかも、後半、何か物騒だったしね」

やれやれとばかりに頷き少女二人を、グレンは矢張りぼんやりとした顔で見つめるのみ。

「ていうかさあ」

ほぼ空になった子羊のシチューが入っていたボールを脇によけて、ニーニヤが木製のスプーン片手に身を乗り出す。　小柄な彼女には

少々高い位置に設置された椅子では、足が地面にはつかず、ぶらぶらと両脚を宙に揺らせた。ずいとい片肘をつけば、否応にもその豊かなバストが強調される。ヴェランデ人にしては珍しい、薄い青の瞳を細めると、

「グレンはさあ、あたしたちと旅をしていて、何にも思わないわけ？」

「こら、ニーニヤ」

新鮮なサラダの上に、どっさりと盛られたキノコのソテーをフォークでつつきながら、ユリアが眉をしかめた。食堂の鈍い光に輝く紺色の長い髪は、時折さらさらと流れて、それを疎ましそうに耳にかける仕草は、年齢よりも上の印象を与える。

「いいじゃん。ユリアだって、気になってたでしょ？」

「私は、別に……」

「うっそだあ！　だって、こんなの初めてじゃない？　絶対、気になってるはずだよ」

「そりゃあ、まあ、気にならないわけじゃないが……」

「ほらあ」

鬼の首でも取ったかのように、ニーニヤが破顔する。それを煙たそうに見たものの、諦めたようにため息をひとつついて、ユリアは自分の食事へと視線を戻した。

「と、いうわけだえ」

「え？」

「グレン！　正直に答えなさい？　あたしたちと一緒にいて、何も思わない？」

「腹減ったとか？」

「そういつことじゃなくて！ あたしたちについて、何か思わない？」

「ニーニヤ、唇の端に肉の切れ端がくっついてるなあ」

「そうそう、どっちかっていうと、そっち系で、って、ええ！」

ぼんやりと食らった指摘に顔を赤めて、ニーニヤが空いている方の手の甲で、ごしごしと口周りを拭いた。

「取れた？」

「うん」

「そ、それでねっ！ グレンとしてはさ、結局、あたしとユリアのどっちが好み？」

「……何をするとき？」

「うわあ、すごい切り返し。聞いた、ユリア？ グレン、変態だよ。分かってたけど、むっつりだよ。何をするとき？ だつてさあ。やつらし」

これ見よがしのひそひそ声でニーニヤが言うと、ユリアが勘弁してくれとばかりに頭を抱えながら赤面する。ニーニヤは、その童顔に反して、ときにとても親父臭い発言をする。セクシー系で売っているユリアだが、そのへんのモラルは、そこいらの子供よりも高いので、正直、今の会話は彼女にとっては大変好ましくない。

嵐がさつさと過ぎ去ってしまうようにと、沈黙を決め込むことにした。

ひゅーひゅー、グレンのむっつりなどと、無責任な野次を飛ばしているニーニヤをしばし見つめたあと、グレンはぽんと手を打った。

「分かった！」

「なにが？」

「ニーニヤは声がかいから、きつと羊飼いに向いてる」

「……………はあ？」

「ユリアもそう思わないか？ ニーニヤの声があれば、きつと羊たちはびびって、すぐ言うこと聞くと思うんだ。そしたら、牧羊犬も必要ないし。ニーニヤだけで済む」

「何、あたしだけで済むってどういうこと」

「だから、牧羊犬の餌代とかさ、馬鹿にならないから。それが、ニーニヤだけで済んだら、結構な節約だよなあ」

「あたしは、犬と同レベルかー！ーっ！」

叫んでから、傍らのユリアがくつくつと笑いを堪えようと、上半身を折り曲げて耐えているのを見つける。ユリアまで！と、悔し涙を浮かべてグレンを見れば、

「あ。ニーニヤの髪、ふたつに垂れてるから、なんか犬みたいだしなあ」

などとぼざく始末。

「これは垂れてるんじゃないの、結わえてるの！そして、あたしの耳はここ！人間と同じ場所にありますから！このツインテールじゃ、何も聞こえないから！」

「そんなの、知ってるよ」

躍起になって怒鳴り返せば、一向に空気を読めないグレンの澄ました声が返ってくる。弁の立つ相棒が、唸り声を出すだけにとどまっている状況に、ついにユリアが笑い声をあげた。

「なによつ、ユリア。ひど〜いっ」

「すまんすまん」

「ユリアは、何が良いかなあ」

言い出したグレンを遮って、ユリアが親切そうな笑みを浮かべる。自分が冗談のネタにされると、どうしていいか分からないユリアであつた。

「まあ、何はともあれ、私たちのどちらも、グレンの恋愛対象にはならないということが分かったな」

「れんあい？」

首を傾げるグレンに、

「恋愛。恋だとか愛だとかの類だな。誰かのことを特別に好きになるということだ」

「おれとアメリカみたいな？」

「うっ、そ、それは色々な意味で問題発言だな……」

顔を引き攣らせるユリアに代わって、立ち直ったらしいニーニヤが目を細めてグレンを睨む。

「グレン、それは犯罪だからやめときなよ。度の過ぎたシスコンでむっつりで無神経ってだけでも、すでにキミの男としての価値は最悪なんだから」

「ん？」

今ひとつ事情を飲み込めていないグレンが、ポテトの欠片と炙り焼きにされた肉を口に放り込む。もぐもぐ、と健康優良児らしい食べっぷりを見せる彼を、少女たちはやれやれと見守った。

「まあ、あれだよねえ。　こーんなグレンでも、もしかしたら、公女さまには心奪われちゃうかもね」

「ふふ。　案外、それもありえるかもしれない」

「ひゃふへほひゃひょ？」

「今、絶対、誰？って言っていないでしょ」

未だ、もぐもぐと咀嚼を続けるグレンを見下げてから、ニーニヤが笑顔になる。

「なーんと！　グレンが見つけたポスターの女の子情報が、既に見つかってるんだなあ　あたしたちったら、優秀うー」

もぐもぐもぐもぐ。　充分立派な歯を持っているくせに、何故かゆつくりと食べるグレンが口を開くのを、居心地悪くふたりは待つ。やがて、ユリアが後ろ頭を意味もなく掻こうかと手を伸ばしたころ、やっとグレンはごきゆり、と大きな音を立てて飲み込むと、そのまま、豪快に山羊のミルクを飲み干した。

「え、なんて？」

「だからっ！」

がくりと今宵何度目かに頂垂れるユリアを横目に、ニーニヤが両の拳を振り上げる。

「あの、ポスターの女の子！　誰なのか分かったって言ってるのっ！」

「誰？」

「~~~~~っ！」

言葉にならない苛立ちを、強く歯ぎしりすることで見事に表現し

てから、ふいにニーニヤが立ち上がる。くるりときびすを返すと、

「あたし！ 食後のお茶買ってくる！ ユリアの分も買ってくるね！」

と言が残して、すたこらさつさとその場を後にしてしまう。

「ニーニヤ……」

押しつけやがったな……と、齒痒そうにニーニヤの背中を見つめるユリアは、しかし、観念したようにグレンに向き直る。ミルクのせいで、白いひげを鼻の下にこしらえたグレンは、にこりと邪気の感じられない笑顔を見せた。

「あのポスターの少女は、アレックス・テレンシアというそうだが、御年十六歳。ここ、テレンシア領を収める、テレンシア公爵の一人娘らしい。テレンシア公には、他にご子息などおられないようだから、彼女が正式な跡継ぎだそうだ」

「ふん。えらいひとなのか」

「……………。そ、そう！ そうだ！ え、えらいひとなんだ、グレン！ よく理解してくれたな」

世間知らずの田舎者のグレンと過ごしてきた日々によって、相手に求める理解力のハードルが、既に地上すれに下がっていることにも気付かず、ユリアは思わず頬を上気させた。

「その、公女さまなんだがな。どうやら、ここいらでは有名な。なんでも、頭脳明晰、容姿端麗、留学などもされていないのに、何力国語も操り、芸術、経済にも精通し、しかも、一度お姿を拝見するだけで、夢見心地になるほどの美貌らしいぞ」

「ふん。 どういうこと?」

「つまり、めちゃくちゃ美人ってことだ」

あまりにもめちゃくちゃな意識だったが、グレンは、ほほうと感嘆の声を漏らした。

「アメリカよりか」

真顔で聞かれて、つい、

「かもしれん」

答えると、

「何言ってんだ、ユリア。 アメリカより可愛くて、キレイで、将来有望なこ、この世のどこにもいないんだぞ? 何だ、ユリアは結構世間知らずなんだなあ」

はははと快活に笑うその首を、ぎりぎりと締め上げたい欲望と闘いながら、ユリアは暗澹とした笑い声をそれに重ねた。



#### Scene 4 : IDにおけるシュールレアリスム考察(前書き)

ほんとうつつつに更新が遅れてしまって申し訳ありませんでした。  
誰これ?このグレンての?何でこんなに馬鹿なの?

とか

何このニーニヤっての、叫んではっかりじゃん?

とか

ユリアってひと、可哀想……

とか

そもそも、何なの?こいつら

とか思われた方、ごめんなさい。作者の怠慢のせいです。  
次の更新は、なるべく、なるべく、早い目に……。

#### Scene 4 : IDにおけるシュールレアリスム考察

あんぐりと口を大きく開いたまま、ふたりを見比べるニーニヤと、眉根に深い皺を刻み込んで、額を手のひらで覆い沈痛に目を閉じたままのユリアのあいだで、グレンはぱちぱちと何度かまばたきを繰り返した。

「……なんで？」

それが、ニーニヤの必死の思いで紡ぎ出した言葉だったが、

「なにが？」

あつさりとかわされて、齒を食いしぱり憤怒の形相を見せつけるが、グレンはにこにこしたままだった。

「グレン」

見かねて、ユリアが口を開く。

「お前、本当に持っていないのか？」

「なんだったつけ？ あい、あい、あ……」

「ID。身分証明書だ」

「それって、どんなの？」

つい先程、ほんの二分ほど前にも見せたはずなのだが、と思いつながら、ユリアが丁寧に四つ折りにされた紙を取り出し広げてみせた。

「これ、何て書いてあるんだ？」

「……読めないのか」

「だから、言っただろー。おれは、字が読めなくても良いんだって」

「なんで」

無然とした顔のまま、ニーニヤが問う。

「だっておれ、農民だもん」

「ああああ、いまのなし、いまのなしね、おじさん！」

三人の掛け合い漫才のようなやり取りを黙って見守っていた、テレシヤ領関所番の男性に、ニーニヤが愛想笑いを振りまく。

自分よりも遙かに高い位置にある、グレンの首元に腕を伸ばしてひつつかむと、ぐいと引つ張った。

「ちょっと、何でこっちに顔を寄せてくれないのっ」

びくともしないグレンに、唇を尖らせると、

「ん？　なんで？」

「いいから、ちょっとこっちに来い、グレン」

顎で、門番から離れた位置にある、質素な木造ベンチを示して、ユリアが先にそちらへ向かう。グレンが急に動いたせいで、引きずられそうになりながら、ニーニヤも後を追った。

「もう一度聞くぞ。グレン、お前が成すべきことは何だ」

「アメリカのところへ、一刻も早く帰ることだ」

「……。そうだな……。そのためには？」

と、思わずこめかみを押さえてしまいながら、ユリア。

「さっさと勇者になる」

「そのためには？」

「有名人に、おれが勇者だって世間に言ってもらう」

「有名人というのは、この場合は？」

「あ、えと、あ、何だったっけ。あ、あい、あいでいー？」

「それは身分証明書だ」

「あ、そっか。えっと、何だったっけ。あの、ポスターの」

「アレックス・テレンシア」

「そうそう！ 金づる！」

「そういうことは大きな声で言わなくて良いっ」

「えー？ だって、そう言い出したのはニーニャじゃないか」

叱られて、拗ねたようにニーニャを見やれば、当の本人は空々しく口笛を吹いていた。

「アレックス・テレンシアを助けなければいけない。ここまで  
は、分かるな？」

「うん。だから、さっさと行こう。その、何とかってひと  
ところに」

「だからっ！ そのために、この関所に来たんでしょーがっ！  
そしたら？ 勇者だぜとかって息巻いてる誰かさんが、ID持っ  
てないとか言い出すから、ややこしいことになってるんでしょ  
う？  
ていうか、そもそも、何でID持てないの？ 何なの？ グレン、  
あなたは一体何なの？ 今日日<sup>きょうび</sup>、お金持ちのペットですらID持っ  
てたりするんだよ？ じゃあ何、グレンはペット以下なの？ 馬鹿  
だ馬鹿だと思ってたけど、常識の全く通じない田舎者だと思っ  
ていたけど、グレンはそんつつつつなにか家畜に近い人間なの？ そ

れとも、人間ですらないわけ？　どうなの、そこんとこっ！」

怒髪天を衝く、という形容詞のぴったりくる形相で、ニーニヤが白い肌を上気させて叫んだ。興奮し易い質で、尚かつおしゃべり好きな彼女は、気分が高まると同時に早口になる。事実、最後の方は、渡り鳥の大群を思わせるノイズのようにしか聞こえず、慣れたユリアですらも訝しそうにニーニヤを見つめるばかりだった。

「とりあえず、だな。　グレンのIDを何とかしないと」  
「はあ、はあ……。　そ、そうね」

息も切れ切れにニーニヤが頷くと、やおらグレンににじり寄る。

「ユリア！」  
「おう！」

絶妙のタイミングでユリアがグレンを背後から羽交い締めにする  
と、その隙にニーニヤがグレンのポケットをがさごそと漁った。

「な、何するんだ」  
「どうせね、グレンのことだから、本当はIDくらい持ってるんじゃないよ。　だって、IDがないなんてそんなこと、あり得ないもの。　だから、残ってる可能性としては、グレンの頭が本気で悪すぎて、IDを持っていることを忘れてしまったか、IDをIDとして認知していないか、そのどっちかだって」  
「…………ユリア？」

特に抵抗するでもなく、グレンは眉を八の字に下げてユリアを困ったように見た。

「ニーニヤの言ってる意味が分からない、か？」

「うん」

「後で説明してやるから、今は大人しくしている」

「うん」

大きな嘆息をつくユリアだったが、グレンの呆れ返るほどに純朴な笑みに、やれやれとかぶりを振った。

「おし！ あつたり〜！ やっぱあたしってば天才！ 頭良い！ 勘も良い！ ついでに、可愛い！ くうっ、天は二物を与えたり！」

くしゃくしゃになって、尚かつ何度か水を吸って乾いたらしい紙切れが、ニーニヤによって取り出された。誇らしげに歯を見せると、紙切れに素早くキスを繰り返す。今にも踊り出さんばかりの振る舞いに、グレンが首を傾げる。

「……ユリア？」

「放っておいてやれ、グレン」

「うん」

グレンが、放置という優しさの応用をユリアから学んでいる間、ニーニヤはいそいそと紙切れを広げると、

「どれどれ〜？ ほらー、やっぱり持ってるんじゃない、ID！ 嘘をつけたのよね。ええと？ ほほう、あたしとユリアよりもひとつ上なのね。意外と童顔よね、グレン。さあて、肝心の職業はつと……。……………！」

満面の笑顔がさつと曇ったかと思うと、ぎゅっと目を瞑って、こ

しごとと目元をこする。　かと思えば、まるで重度の近視に悩むかの如く紙切れに顔を近づけ、はははと乾いた笑いを繰り返し、そうして最終的には笑いたいのをこらえているような、いっそ泣いてしまいたいような、お手上げだと言わんばかりの顔でユリアを振り返った。

が、もちろん、グレンの背後にいるユリアには、その表情はグレンの大きな背中に遮られてまったく見えず、図らずもグレンと同じように首を傾げるのみ。

「ユリア」

「ど、どうした、ニーニヤ」

「もお、やだあ」

「な、何がだ」

「グレンの職業欄が……」

「何が書いてあるんだ？　白紙なのか？」

「ううん、ちゃんと書いてあるよ。くつきりはつきり、間違え

ようのないように、むしろ忌々しいくらいに濃い字で書いてあるよ」

「何て？」

「農夫って！」

「な！」

職業に貴賤はない、と信じている人間愛に溢れたユリアだったが、あまりのことに声を上げてしまう。

仮にも、これから貴族の娘を助けに行こうと、勇者として名を上げようと、名剣と誉れ高い『ファイアツマ・バグリア金穂の炎』を手にする者が、農夫とは。

シニール過ぎる。　上質のブラックジョークのような展開に、ユリアは目眩を覚えた。　その感覚が、日常的になりかけている自分

の今の生活にも、シニールレアリスムが忍び寄って来ているのだろうか。 何と、恐ろしい。

このまま、何も知らなかった頃に回れ右して走り去ってしまいたい衝動を押さえると、ユリアは半泣きのニニヤにぎこちなく微笑んで見せた。

「だ、大丈夫だ、ニニヤ。 か、カモフラージュ。 そう、カモフラージュだよ。」

農夫というのは、カモフラージュなんだ」

「そっか！ 勇者ってばれちゃうと、ねずみ小僧的クオリティが損なわれるから！」

「ねずみ……？ 何だ、それは」

「異国のカルトヒーローだよ。 この間、東からやってきたっていう商人のおっさんからもらった絵本に書いてあったの」

「そ、そうか。 グレンはカルトヒーローか……」

この期に及んで、まだぼんやりとへらへら笑い続けているグレンの牧歌的な横顔を見つめて、ユリアは呟いた。

何と、シニールな。

「とりあえず一旦は、問題解決ね！」

立ち直りの速さでそこいらの雑草よりも定評のあるニニヤが、すつくと背筋を伸ばして輝くような笑みを浮かべる。

「さあ、待ってなさいよ、アレックス・テレンシア！ ちゃきちやき助けに行つてあげちゃうんだからっ！ おじさん！ IDありましたー」



ぼろぼろの紙切れを頭上高く掲げて、ニーニヤが関所番に走り寄っていくのを見ながら、グレンはにこにこ笑顔のまま、

「お？ 何かニーニヤ、楽しそうだなあ。何か良いものでも見つけたのか？」

目眩を伴う頭痛から解放される日が、どんどんと遠ざかっていくのを切に感じながら、ユリアはグレンに頷き返した。

Scene 5： グレンくん開発部隊、目下特訓中（前書き）

.....。

あわわわ……。

お久しぶりです、とか言うのも憚れるような更新スピードで本当に  
ごめんなさい。

もし万が一、これを楽しみにしてくださっていた希有な読者さまが  
おられましたら、ありがとございますとごめんなさいを呪文のよ  
うに唱えたいと思います！

## Scene 5： グレンくん開発部隊、目下特訓中

さわさわと揺れる森の葉っぱも、遠くから聞こえてくる鳥のさえずりも、たしかにヒーリング効果を持つていそうなもののなに、ユリアの頭痛は治まるところを知らず、ニーニヤのストレスレベルは本人の意思とは裏原に、どんどんと上昇していくようだった。

「もう一度。 もう一度、おさらいしようか……」

苦虫を、奥歯でごりごりすりつぶす勢いでユリアが口を開くと、

「なにを？」

と、神経を逆撫でするのにつつてつけないグレンの返答。

「っ！」

だから！ あんたが、さっきから聞いてきてることでしょう！  
何で忘れるかな、それとも何、今までのそれは全部独り言なの？  
体力ばかりつけて、脳みその発育が遅れてる農民勇者さまは、結局、アメリカちゃんのことしか記憶出来ないような、おつむの痛い、役立たずなの？

数々の罵倒の言葉がニーニヤの脳みそを駆け巡ったが、下唇をしっかりと噛むことで、何とか抑えた。 すーはーすーはーと何度か深呼吸を繰り返す。 彼女の胸を凝視することに集中しまくっていた親父が、いつぞや、彼女に教えてくれたリラックス方法だ。 効果があるのかは定かではないが、大抵の物事など、気の持ちようなのである。 親父は結局、はあはあと荒い息を上げながら、両手を

気持ち悪く動かして近付いてきて、ニーニヤの容赦ない蹴りが顔面に炸裂したので、呼吸法の奥義とやらは教えてもらえなかったことが少しだけ残念だったことを思い出した。

「グレン。これはね、アメリアちゃんにも関連することなの」「何！ アメリアに！」

目を細めて、新たなアプローチを試みれば、完全なるニーニヤの勝利であることが、グレンの上気した頬から伺いみられる。

いよしっ！

心中でガッツポーズを取り、尚かつ、交わした視線で勝利の愉悦を味わいながら、ニーニヤとユリアはグレンに向かって精一杯の優しい微笑みを向けた。

「グレン、お前の職業はなんだ？」

「農民！」

「違うでしょっ！」

即答したグレンの後頭部に、ニーニヤの突っ込みが舞う。

「えっ？」

「グレンの職業は、勇者！ ゆ・う・しゃ！ 分かるー？」

「グレンが勇者になることを望んでいるのは、どこの誰だ？」

「アメリア！」

「そうだ！ そして、そのアメリアちゃんを世界で一番大事に思っているのは、どこの誰だ？」

「おれ！」

「そうそう、その調子！ そいでもって、そのアメリアちゃんに

褒められたいの、どこのだあれ？」

「おれ！」

「いいぞ、グレン！ では、アメリカちゃんに喜んでもらうことを、世界で一番喜ぶのは、どこの誰だ？」

「おれ！」

「そうだよな！ じゃあ、グレンが勇者さまになって、アメリカちゃんが喜ぶんだったら、グレンは勇者さまになるよね？」

「うん！」

「では、グレン。 お前の職業は？」

「ゆ、えっと……」

「ゆ・う・しゃ」

小声のニーニヤの顔をちらりと見てから、グレンは高々と宣言をする。

「勇者！」

「素晴らしい！」

「すごいわ、グレン！」

赤ん坊が初めて立ったときの母親の興奮そのままに、ニーニヤとユリアは、両の手で拳をつくるグレンを、心なしか潤んだ瞳で見つめた。

「と、いうわけで、初めの質問に戻るんだけどね」

「ん？」

「あたしたちの、職業。 ちゃんと、説明してなかったでしょ？」

小首を傾げて尋ねるニーニヤを、ユリアが援護射撃する。

「私たちの職業も、アメリカちゃんの勇者としては知っておきた

いところだからな」

「おう！」

「しめしめ……」

「しめしめ？」

「あ、今は独り言！ 忘れて、忘れて！」

「おう！」

単細胞で良かった、と胸を撫で下ろしたニーニヤが、一部の同じ様たちであれば、たちどころに財布の中身をばらまきたくなる笑顔を作ったが、グレンはへらりと笑い返すのみだ。

「じゃ、まずはあたしからね」

「うん」

「あたしの職業は、賢者。回復魔法とか、防御魔法が得意なの」

「なんだ、それ？」

「うんとね、例えばね、怪我をしちゃったりするでしょ？」

「うん」

「そういうのを、瞬時に治せるんだよ」

「へえ、すごいなあ。牛とかが唾液で傷を治すのと一緒にだな」

「……、いちいち、動物と比較するの、やめてくれない？」

「なんで？ 牛は、良いやつだぞ？」

「いや、良いやつかどうかは知らないから……」

眉を顰めるニーニヤの肩を叩いて、ユリアが努めて明るい声を出す。

「どうだ、ニーニヤ。デモンストレーションしてみれば」

「あ、それ良いね！」

ちよっと失礼、と言いながら、ニーニヤがグレンの腕を取り、袖

をまくる。あらわになった筋肉の美しい腕に、腰に差していた短剣をあてがえると、すっと薄く皮膚を切った。いや、正確には、切ったと思った。その頑丈な肌は、まるで鋭利な刃物など受け付けないといった風に、傷といったようなものは全く見受けられない。

「えっと……」

「くすぐつたいよ、ニーニヤ」

へへへ、と笑うグレンを、気持ち悪そうに見上げて、ニーニヤが後ずさった。

「ユリア、あいつやっぱり変態だよ。ぶっちゃけ、怖いよ。単細胞の筋肉バカって、肉体的な傷すら付かないってことなの？」

「どうなんだろうな……」

こほん、と咳払いをしてから、ユリアがしゃなりとその美脚を惜しげなくさらしてから、一歩進み出る。

「私の職業は、魔導士だ。ニーニヤの賢者とは対をなす職業だな。主に、攻撃魔法を得意とする」

「ふーん。それって、役に立つのか？」

「っ！ た、立つ！ 失礼な」

「だって、魔法って、詠唱時間があるんだろ？」

「な。何で、お前は魔法の詠唱時間のことを知ってるんだ」

「アメリカが言ってたから。アメリカは、何だったっけか。精霊使いになりたいって言ってたな」

「それは、魔導士や賢者のトップにたつ職業だな」

「アメリカにぴったりだな！」

「……そうだな」

「で、その精霊使っていうのは、どうやったらなれるんだ？」

「グレンは、魔力検定はしていないと言っていたな」

「うん、してない」

ふ、とため息のような息を漏らしてから、ユリアが気怠そうに腰に手をやった。そこいらの健常男子であれば、ひれ伏したくなるような姿ではあるが、またしても、グレンは目をぱちくりと瞬かせるのみだった。

「生まれてくる子供は、イル・レガー由ランスパレンテ> 透明な魔力<と呼ばれる無色透明な石を持たされるんだ。それは、個人の魔力の質量によって、その色と性質を変化させる。魔法には、様々な種類があり、それらは、光・闇・火・水・風・地の六種類に分けられるんだ。例えば、火に特化した魔導士は、石がルビーになるし、地に特化したものは、ガーネットを持つ」

真剣に話を聞いているグレンに微笑むと、ユリアが傍らのニーニヤを見やる。すると、彼女は阿吽の呼吸で、

「それから、特殊枠で、魔法使いと精霊使エレメントについているのがあるね。大抵の魔導士は、ひとつの資質エレメントにだけ特化しているんだけど、希に、すべての資質エレメントを使いこなせる魔導士が存在するんだよ。それが、魔法使い。ただ、魔法使いは、全ての資質エレメントを使える代わりに、魔導士ほどの魔法威力がないことが多いんだけど、魔導士と同等の威力が、それ以上の威力を持ち合わせていて、尚かつ全ての資質エレメントに精通しているのが、精霊使い。精霊使いはレア中のレアでね、百年に一人とか、二百年に一人しか生まれないって言うの」

と、流暢な説明をした。

「で、アメリカはどうやってたら、その精霊使いになれるんだ？」



「まー、てつとり早いのは、イル・レガー由ランスバレンテ透明な魔力くを持たせてみるんじゃないかなあ？」

「それは、どこで手に入るんだ？」

期待に充ち満ちた瞳を向けるグレンを、ユリアはしばし直視したあと、意味ありげに流し目で微笑むと、

「それは、もちろん、グレンが勇者だと名声を上げれば、すぐに手に入るだろうなあ」

とだけ言った。

「よし！ 早速、行こう！ なんとかって金づるを助けて、さくおれが勇者だと世界に知ってもらおう！ それで、アメリカは精霊使いになって、おれはアメリカと一生幸せに暮らす！」

大股で、意気揚々と森の中を進んでいくグレンの背中を、してやったりの笑みで見つめたユリアが後を追う。その笑みを目の当たりにしたニーニャは、ユリアの新たな一面を発見した気がしてならないのだった。

## Scene 6 : 嘘のメリット、非常識の有効活用（前書き）

ちよ、ちよっとは更新速度、ましになりましたかっ？（でもまだ遅い）

夏休みに入りましたので、頑張つて更新していけたらと思っておりますっ！よろしく願いますです。

感想など頂けると、すごく励みになります。

## Scene 6 : 嘘のメリット、非常識の有効活用

「あ」

ぽつりと、凡庸に呟かれた声に、ニーニャとユリアが、先を歩いていたグレンへと視線を向ける。

「え？」

同じように、呟くように聞き返したときだった。

雄叫びのようなものが鼓膜を震わせたかと思えば、しなるように鞘から抜かれたグレンの剣が、その頭部を容赦なくまっぴたつに切り裂く。あつという間に、ふたりの少女の目の前には、どくどくと血を流し、身体を痙攣させて地にひれ伏すモンスターの姿が横たわった。

「す」

思わず、素直に感嘆の言葉を口にして、ニーニャが慌てて、手で口を覆った。グレンごときを褒めてたまるかとも言いたそうにして。

「……………」

抜きつばなしの刀身をそのままにして、グレンが佇む。幅の広い肩幅は、頼りがいのある、と形容したくなるような背中につながる。黄金の麦穂に良く似た髪は、時折吹いてくる風に、ひらりひらりと揺れて、少しだけ斜めに傾いた横顔は、まるでお伽噺の勇敢

な騎士のように。

「……………」

モンスターの痙攣は、今や収まっており、無言のそれをじつと見つめるグレンは、ふと、切なそうにため息をついた。

「…………グレン。忘れてはいないとは思うが、それは食べられんぞ」

おそろおそろ苦言を呈したユリアを振り返ると、グレンはもう一度、今度は盛大に息を吐く。

「分かってるよ。もったいない。本当に、食べられないのか？」

「当たり前だ」

「何で、そんなこと知ってるんだ？ 食べたことあるのか？」

「あるわけないだろう」

言って、鼻でせせら笑うと、何故かグレンの顔が明るくなった。

「じゃあ、分かんないんじゃないか！」

「…………は？」

片眉を上げて問い返せば、グレンは白い歯をきらりと輝かせて、ついでにヘーゼルの瞳もきらきらと輝かせて、にっこりと微笑む。

「だって、そうだろー？ 食べたことないんじゃない、食べられるかどうか、分からないじゃないか」

「いや、ちょっと待て、グレン。だからって、そのモンスター

を今食べる気なのか？」

「いや、今食べなくてもさ。取りあえず、解体だけしちゃって、必要な分だけ持ち歩いてさ」

「あたし、嫌だからねっ！ そんな、モンスターの肉持ち歩くの、絶対嫌だからねっ！」

うつすらと青くなった顔で、ニーニヤが抗議の声を上げれば、

「わがままだなあ、ニーニヤは」

と、窘められる。

「わがままとか、そういう問題じゃないでしょっ！ ていうか、本気なの？ グレン、やめなよ、やめとこつよ、そういうのはさあ。田舎者で馬鹿でおつむばっぱーの勇者つてだけで、結構真剣に、あたし、恥ずかしい思いとかしてるんだからさあ。その上、変態で重度のシスコンで、しかもモンスター食べるなんてことが世に知れ渡つたら、あたし、生きていけない！」

「なんで？」

「説明するのも、嫌！」

「じゃあ、分かんない」

「あ、何それ！ 何で無視するの？ 何で？ 何で、ちゃんと説明してよとかって言わないの？ グレンのくせに生意気っ！」

「本題に戻ろう」

真顔でグレンが言えば、ニーニヤはあんぐりと口を開けたまま固まってしまう。飼いだに手を噛まれる、とはこのことかっ！と、その見開いた両の瞳が叫んでいる。

「ニーニヤもユリアも、こいつが食べられないと思ってるんだろ

？ でも、食べたことはない」

こくりと、疲れた顔で頷くユリアを認めて、グレンが満足そうに口元を緩めた。

「じゃあ、食べてみれば良いじゃないか」

「だから……。何で、そういう結論に達するんだ、お前は」

「だってさあ。食べたことないんじゃない、食べられない、とは決めつけられないだろう？」

「それが、有毒だってことは考えないのか」

「ああ、毒キノコみたいなもんだろ？ 匂いを嗅げば、大体のことは分かるよ。それに、ちゃんと火で炙って食べるから。それなら、問題ない」

「道德観というものはないのか」

「邪魔だからって殺した生き物を、野ざらしにする方が、よっぽど無責任だと思う」

「！」

今まで、馬鹿にし続けてきたグレンの、理に敵った反論に、ユリアは驚愕の表情を隠せないでいた。

「ちょ、ちょっと待ってくれ、グレン。 な？ ちょっと、ちょっとだけだから」

「ちょっとだけだぞー」

鷹揚に頷くグレンに、愛想笑いを見せてから、ユリアはニーニヤの襟首をつかんでグレンから遠ざかる。ひそひそと顔を寄せ合うと、

「どうする、ニーニヤ」

「やばいよ。ちゃんと止めないと、あれは絶対、食べちゃうよ。」

「まずいよ」

「分かってる！ だから、どうしたら良いのか、聞いているんだ」  
「やっぱさ、あたしたちが食べてないのが、やばかったんじゃない？」

「まさか、あんな結論に発展するとは思っていないじゃないか」  
「でもさ、あたしたちもそろそろ、常識の受け答えをするのに、気を付けた方が良くもよ。何てったって、グレン、明らかに非常識だから！」

「そ、それもそうだな。そ、そうだ、私たちも食べてみようとしたことがあると言ったらどうだ？ 食べてみようとしたが、食べられないということに気付いたと。それなら、グレンも諦めてくれるだろう」

「諦めてはくれるかもしれないけど、そんなこと言ったら、今度どこかの街に行ったときに、あたしたちがモンスター食べようとしたって、大声でひとに言いふらすかもしれないじゃない？ それって、またしてもまずくない？」

「そうだな。グレンならやりかねん。な、ならどうする？」

「えっとね……。うん、あたしに考えがあるよ。使い回した方法だけど、どうやら、これが一番、グレンには効くみたいだから」  
「よし。任せたぞ、ニーニヤ」

思い詰めた顔でお互いをしばし見つめ合い、一度だけ頷き合うと、決意に満ちあふれた目をグレンに向けて立ち上がる。

グレン、と声をかけようとした。

じつとりとした目つきでしゃがみ込み、横たわるモンスターを観察しているグレンの真横から、その仲間と思われるモンスターが飛び出してくるのが見えた。あれほどまでに優れた反射神経と運動神経を見せつけたグレンだったのに、目の前の肉候補で頭がい

っぱいなのか、それとも脳みその許容量が異常に少ないのか、近付いてくるモンスターには一向に気付く気配がない。

このままいけば、グレンがやられる。 金づる！ 名声！ 将来！！

そう思ったのも束の間、ニーニヤとユリアの体が自然に動いた。

手の平をグレンに向けて、ユリアが叫ぶ。

プロテクション  
「防壁！」

半透明の魔力の球体が、グレンの頭上に現れたかと思えば、瞬時に卵の殻のように彼の全身を包み込んだ。

ワイエント  
「風牙！」

両腕を交差させ、それから腕を真っ直ぐにモンスターに向ける。ニーニヤの爪先から生まれ出た風の刃はたちまち、グレンに距離を縮めていたモンスターの身体を切り刻み、遂には仰向けに倒れさせた。

「グレン、大丈夫か？」

駆け寄ったユリアに、グレンが顔を上げる。びっくりもしなくなったモンスターの巨体とユリアを交互に見てから、ふと首を傾げた。

「今さ、ユリアがおれを守ってくれた？」

「あ、ああ。 今のは私の魔法だ」



グレンに怪我のひとつのことを認めて、ほっと息をつきながら答えれば、さらにグレンが首を傾げる。

「じゃあ、あいつを倒したのは？」

「それは、あたしだよ。魔法でやつつけたの」

少し遅れて歩み寄ったニーニヤが、はにかんだ微笑みを浮かべて言う。眉根を所在なく寄せて、先程とは反対方向に首を傾げて、グレンは、

「魔導士が？ 攻撃？ 賢者が？ 防御？ あれ？ ユリアが……？ 魔導士？ ニーニヤが？ 魔導士……？」

しまった。両者の顔には、はつきりとそう書いてあったが、とりあえず、取り繕った笑顔を浮かべてみせる。

「あ、あのね。グレン。これには深い訳があつて……」

「そう。そうなんだ、グレン。ちゃんと聞いてくれ」

「嘘ついたのか？ 二人とも」

「え？ いや、何て言うか、だから、あの、ちょっと込み入った事情があつてね」

恨めしそうに見上げるグレンの視線に、焦って上ずった声を返せば、

「じゃあ、あれだろー。このモンスター食べられるっていうのも、どうせ嘘なんだろー。ちえー。ふたりとも、すぐおれをからかうんだもんな」

「……え？」

あたふたとせわしく両手を動かしていたニーニヤが、ぴたりとその動きを止めた。そろりとユリアを見れば、言いかけた言葉をごくりと飲み込む姿。

「……そ。そうなんだよ！　すまない、グレン。　ちょっとした、冗談のつもりだったんだ！」

「い、いやあ、まさか、グレンが本気でモンスター食べてみたーい！　なんて言うとは思わなくてさあ！　あははー。　ごめんごめん」

「ったくー。　ふたりが、おれに食べて欲しそうにしてたから、なんか怪しいと思ったんだよなあ」

「し？　してたっけ！？　あ、し、してたかもね！　あ、あはは！　」

「そ、それはすまなかったなあ、グレン」

乾いた笑い声を上げながら、少女たちは、改めてグレンの思考回路の予測不可能さに下を巻いていた。　誰がモンスターの肉を勧めるか！　という当然至極な突っ込みも出来ずに。

**S c e n e 6 : 嘘のメリット、非常識の有効活用（後書き）**

次はIntermezzoを挟んで、Act IIIIでは、少し過去に戻ります。

ユリアが防御魔法に長けている訳、

ニーニヤが攻撃魔法に長けている訳、

グレンが突っ込んでくれなかった部分を書きたいなと（苦笑）。

I n t e r m e z z o : 皮肉なお城のひそひそ話（前書き）

またしても、大分間があいてしまつて、恐縮しかりです……。

今回のIntermezzoは前回とPrologueとは違う人間の視点で書かれています。

たたらたと、お馬鹿な三人が繰り広げてきたこのお話ですが、ここいらでようやくと、流れが変わってくるかもしれません。どうか、気長にお待ちくださいませ。

Intermezzo : 皮肉なお城のひそひそ話

Intermezzo II

「こんなはずじゃなかった」

何度、その言葉を聞いたのだろう。

生まれたときから、その言葉に囲まれていた気がする。

自分のせいではないのに。

そう、これは自分のせいではない。

なのに、皆、あたかもこれは自分の責任であるかのように言うのだ。口をそろえて。

「計算外だった」と。

拳を握りしめて、怒りに震えたこともある。人知れず、涙が頬を伝うままに空を仰いだこともある。知ったことではないと声を荒げてしまいそうになるのを、口唇から血が滲むほどに嚙んで、自分を律したこともある。言葉で反抗する代わりに、わざと周囲を困惑させるような行為に及んだこともある。

すべて、徒労に終わった。

いま、心に残るのは、ただただ、ひたすらの、虚無感。

それとも、自分は「すべて」を試していないだけだろうか。

「すべて」出し尽くせば、何かが変わっていたただのだろうか。

不毛極まりない、「たら」と「ねば」の世界の中で、自分は、何を見つけられるというのだろうか。それこそ、非生産的で不毛だ。

そんな役立たずの自分を、鏡の中で自虐的に笑う自分を嘲り、一笑にふしてみせても、やっぱり何も変わらないのだ。

「こんなはずじゃなかった」

気付けば、その言葉を口にしていたのは、自分だ。

なんて、皮肉な。

自分を笑い飛ばすのにも疲れ果てて、周囲を振り回すのにも嫌気がさした頃、あれに出会った。

それを、ひとは何て呼ぶのだろうか？

運命？

それとも、人生の仕組んだ、新たな狂言？

どちらでも構わない。

何故？

それは、誰かに理解してもらわねばならないことではないから。  
誰かに説明しなければならぬものではないから。

それはとても、滑稽な狂言だったから。 それはとても、自分に  
おあつらえ向きの運命だったから。

Act III ; Scene 1 : 憧れは時として唐突に

自分じゃない自分になりたいなんて、それまで思わなかった。

まだ物心もつかない時に握らされた、魔力検定の石は、はつきりとピンクパールに変化して、それはつまり、自分が癒しの魔法を使う者だと決められた瞬間でもあった。

魔力検定の石は嘘をつかないと、何度も周囲に諭されたけれど、どうしても諦められなくて、なけなしのお小遣いで石を手に入れては、何度も試してみた。　どうやっても、ピンクパールしか手に入れないと悟ったときには、身長が伸び始めていた。

十二歳で入った魔法学校で出会ったニーニヤと同じくらいの背丈だったはずなのに、いつ頃からか、どんどん彼女のつむじが見えちゃうくらい背は伸び続け、ニーニヤの身体が女らしく成長する中、自分の身体は棒つきれのようなまま。　ヴェランダの太陽を吸収し続けた肌は、冬が巡ってきててもなめし革のように艶やかままで、せめてヴェランダ北方に生まれていれば、もっとガラス細工のような肌になれたのだろうかと思う。　女は声変わりはいらない、なんて聞いていたのに、自分の声はどんどん低く掠れて、まるで煙草シガッロ常習者のよう。　煙草なんて、吸えないのに。

こんな風になりたかったわけじゃない。

もっと幼かった頃に、なりたいたいと思い描いていた自分の姿とは到底異なる現実に、少々の不満は覚えど、悲嘆に暮れていたわけじゃない。

あの日が来るまでは。



「ユリア！ ユリア！ ユリア！ ユリア~~~~~！！」

ニーニヤのよく通る声が、自分の名を呼び続けながら、徐々にこちらに近付いてくる。その声量が増してくると同時に、周囲を歩く人間が、好奇の目でこちらを振り返ったり、はたまた、その音の大きさに顔を顰めたりするのには何の興味も引かれず、ニーニヤは同じ単語を繰り返しながら一直線に走ってくる。

「なんだ、ニーニヤ。あんまり大きな声を出すな。周りの人間の鼓膜のことも考えろ」

苦言を呈しつつも微笑すれば、ニーニヤはぷくりと頬をふくらますと、

「大声出さいでかってえの！ 大ニュースなんだからっ！」

「ほう？ また、部屋に蜘蛛が出たとか、そういうことか？ しかも、小指の爪サイズの。だとしたら、それは大ニュースとは言わんということ、そろそろ学んだ方がよいぞ」

「もー、ユリアはすぐそうやって、あたしのことをからかうんだから。違うの、今日は本当に大ニュースなんだってば！」

ここでニーニヤは思わせぶりに目を軽く見開いて、ユリアの反応を試すようにみる。しばしの間、大ニュースとやらに思いを馳せてみたものの、お喋り好きの幼なじみと違って、日頃からゴシップという名のニュースを取り入れる習慣のないユリアには、さっぱり見当がつかなかった。

「なんだろうな」

「聞きたい？」

「言いたい、の間違いだろう？」

「いやもちろんそうだけど、え、なになに、知りたくいって言われた方が、言う本人もテンション上がるってもんじゃない？」

「ふふ、なるほど。是非、聞かせてもらいたいな」

「じゃあ、教えてあげるっ」

満足そうに齒をみせるニーニヤを、柔らかい目で見つめて、ユリアは次の言葉を待った。

「転入生だつて！ 残念ながら、あたしたちの学年じゃなくって、一個上なんだけどね。それがね、ただの転入生じゃないの。すごい才能あるこなんだつて。しかもね、しかもね、なんと、真正銘のお姫様なんだつて~~~~。すごくない？」

「お姫様？」

「ロクサンヌ公国の公女様らしいよ」

「すごいな、魔導士のサラブレッドじゃないか」

ロクサンヌ公国は、その所有する魔法騎士団の強さにおいて、世界随一だ。

「でしょでしょ、すごいでしょ。しかもね、校長先生直々のお達しがあつて、シーニヤ先輩と相部屋なんだつて！ すつつつつこくない??」

シーニヤ・エモリスは、ひとつ上の学年に在籍する、ニーニヤの憧れの先輩だ。通常、十二歳からしか入学を許可されていない、全寮制魔法学校に、十歳で入学。そればかりか、齡十三歳にして、世界でも数名しか授与されないという『<sup>サン</sup>聖』の称号を与えられた、凄腕の賢者。今現在、世界で唯一の『<sup>サント・サッシュヨ・バハコ</sup>聖なる白賢者』である彼女は、女子高であるこの学校において、王子様のような存在で、だか

からこそ、誰も彼女と相部屋になることは許されていない。

「でもまた何故、転入生と？」

そんなことをすれば、転入生が、全校生徒からの嫉妬的になるのは、目に見えているというのに。

「うーん、なんかね、詳しいことは分らないんだけど、知り合いたいだよ？ ほら、シーニヤ先輩って、お仕事とかで学校の外に出ることが多いじゃない？ だからじゃないかなあ」

「ああ、なるほどね……」

ありえない話ではない。

「ニーニヤは、羨ましいとかはないのか？」

「いやあ、そりゃあさ、シーニヤ先輩と四六時中一緒にいられるなんて、超！羨ましいけど。でもあたし、ユリアと相部屋の方が好きだから。シーニヤ先輩と一緒にいても、緊張しちゃって、何も喋れなくなっちゃうしね」

そう言って、照れた笑いを浮かべるニーニヤに、素直に感謝の言葉が告げられず、ついついユリアは話の矛先を自分から逸らした。

「何言ってるんだ。ニーニヤは、シーニヤ先輩相手でも、よく喋るくせに。　　っと、噂をすれば」

目配せをした先には、シーニヤ・エモリスの姿。小柄ながらもグラマラスなその体型はと、艶やかな黒髪のおかつぱ頭は、どこにいても人の目を引く。他人とつるむのを好まない彼女は、大抵、ひとりで颯爽と歩いているのだが、今日はそうではなかった。隣

に、彼女と良く似た背丈の少女の姿がある。

「あ、シーニヤ先輩だ。あ、ねね、隣のこつてもしかして、例の転人生？ わお！ あたしつてばラッキー、もう遭遇出来ちゃった。てつきり、午後の全校会合まで待たないといけないかと思つてたのに」

独り言にしては大きな声で呟いてから、ニーニヤが大きく手を頭上にかざして左右に振った。

「シーニヤせんぱーい。シーニヤせんぱーい！」

聞こえないはずがないニーニヤの大声に、シーニヤ・エモリスは軽く視線をこちらに向けると、隣の少女に何事が囁いて、二人揃つてユリアたちの方へ歩き始める。

「シーニヤ先輩！」

「なんやねんな、ニーニヤ。そない大声出さんかて、充分聞こえるつちゅうねん」

神秘的な湖を彷彿とさせる翡翠色の猫目をいたずらっぽく輝かせて、強い北ヴェランダアクセントでそう言った。少しつつけんどんな物言いも、彼女が言つと、不思議ときつく聞こえない。

「転人生が入ってきたつて聞いたんですけど」

持ち前の好奇心を発揮させて、ニーニヤが甘えた声でそう尋ねれば、シーニヤ・エモリスはくすりと口唇を蠱惑的に歪める。

「おお、おお。情報の早いこと。なんやニーニヤ、壁に貼り

付いてゴシップ収集してばかりで、ちゃんと魔法の勉強してへんのんとちゃうんか」

「あ、ひつどーい。あたし、こうみえても、勉強はちゃんとしてるんですよ」

「こうみえても、ちゅうことは、不真面目にみえる自分をちゃんと認識しとる、ちゅうことやな。結構、結構」

「も～～」

なんだかんだと言って、シーニャ・エモリスに好かれているニーニャが、じゃれ合うような会話を続けている間、ユリアは傍らに立つ少女を観察していた。

柔らかそうな栗色の髪は、赤いシルクのリボンでポニーテールに結わえられ、真新しい制服から伸びる手足は、東方の陶器を思わせる滑らかさ。利発な色を見せているヘーゼルの瞳は、ニーニャたちの会話を注意深く見ていて、高貴な薔薇に良く似た口元は、うっすらと微笑の形をとっていた。

そこまで不躰に見ていたつもりはなかったものの、その佇まいから溢れ出んばかりの気品ある雰囲気圧倒されていたユリアは、当の本人がゆっくりとユリアに向き直ったことに気が付かなかった。

「お、すまんすまん。紹介すんのがまだやったな。ニーニャ、ユリア。これがその転入生や」

「リオ・スシールです。はじめまして」

につこりと微笑んで、こなれた仕草で上流階級の会釈をしてみせる。鈴を転がすような声には、ロクサンヌのアクセントはひとつもない。

「初めまして、あたし、ニーニヤ・ガルダスです」

言ったニーニヤの肘につつかれて、ようやく、ユリアも我に返ったように口を開く。

「初めまして。 ユリア・モースタンです」

「どっちも、うちのいつこ下の学年や。 ユリアは賢者、ニー

ニヤは火の魔導士フォーコや」

「あら。 じゃあ、まるであたしとシーニヤみたいね」

聡明な瞳を無邪気に丸くして、リオ・スシールが言う。

「どういう意味ですか？」

「シーニヤは賢者でしょ？ ユリアちゃんみたいに。 あたしも、

火の魔導士フォーコなの」

「えー、超偶然」

ともすれば馴れ馴れしく聞こえるニーニヤの言葉に、公女である彼女は骄傲なところはまったく見せず、素直に頷いた。

「ね。 素敵な偶然」

「スシール先輩は」

「リオ。 リオで良いわ」

「ほんとですか？」

「ええ。 だって、シーニヤのことは名前で呼んでいるでしょ？  
だったら、あたしのことをわざわざアベジード名字で呼ぶことはないわ」

「えっと、じゃあ、リオ先輩」

「なあに？」

「リオ先輩、呪文詠唱のクラスってもう出ました？」

「呪文詠唱って、なあに？」

「え？」

魔法には呪文がつきもので、呪文詠唱の善し悪しで魔法の精度が左右されるといっても過言ではない。呪文詠唱のクラスは、実技と同じくらい重要視されているクラスで、ここで生徒たちは呪文詠唱のスピードの上昇、及び効率の上昇を学ぶ。基本中の基本に首を傾げる少女に、ユリアとニーニャは思わず目を丸くした。すると、呆れた顔でシーニャ・エモリスは、

「ああ、こいつな、あかんねん。変人やからな。呪文詠唱、したことあらへんねん」

「したことが、ない？ ……というと？」

「なんていうか、イメージ出来ちゃうの。あ、こういうことなんだろうなっと思ったら、その言葉が頭の中に浮かんで、それを言ったり思ったりするだけで、魔法が発生しちゃうのよね。今日、教えてもらったの。それって、変わってるんだってね」

「な？ 変人やろ？」

もう、とふくれてみせる少女を見たとき、初めて思った。

自分以外の人間になりたいと。

愛くるしい容姿に、気品溢れる仕草。あくまでも上品な立ち居振る舞いに、努力しても得られないほどの才能。

それが目の前に現れてようやく、ユリアは、自分の「憧れ」を認識した。

幸か不幸か。

A c t   I I I   ;   S c e n e   1   :   憧れは時として唐突に（後書き）

リオとシーニャは、実は別の作品の登場人物でもあります。彼女たちには彼女たちのお話があるのですが、ニーニャとユリアの人生にも関わっているので、今回は、特別出演のような形で。



S c e n e 2 : 理不尽な世の中と乙女心（前書き）

## Scene 2 : 理不尽な世の中と乙女心

どうしてこうも、人生は、自分の思うままにならないのか。 何かが間違っている。

氣候に恵まれたヴェランダでは珍しく曇天が広がる窓の先を、二ーニヤがなんとはなしに見つめながら、そんなことを考えていた矢先に、ユリアが疲れ果てた顔をして部屋に戻ってきた。

「疲れた……」

掠れて呟くその声さえも艶っぽい彼女は、ばたりとベッドに俯せに倒れ込む。 向かい側に置かれたベッドの上で胡座をかいていた二ーニヤは、いそいそとユリアの傍に場所を変えると、よしよしとその藍色の髪を撫でてやる。

「おかえりー。 どうだった？ 今日の買い出しは」

寄宿生は、基本的には学外に無断で出ることを許されてはおらず、それは特待生として例外ではない。 その校則とは別に、寄宿生が学外に出ることを求められるときがある。 週に一度、順繰りに回ってくる買い出し班は、学生六人で成り立っており、チームを組んで学校の設置された街の中心で、全校生徒用から集計されたアンケートのうち、特にリクエストの多かった日常品や嗜好品を買い出しに行くのが役目だ。 生徒数が多いため、週に一度の役目でも、実際に順が回ってくるのは二ヶ月に一度くらいなものだが、これがユリアの悩みの種だった。

「何であんなにわらわら寄ってくるのか分からない。 私から、

何か変な物質でも撒き散らされているとでもいうのだろうか」

情けない声は、枕に音を吸われて、ますます痛々しい声音になる。

「てことは、また追いかけれちゃったの？」

「……………」

無言の肯定が、ユリアの後頭部から発せられる。

「ほんと、何でなんだろうね。ユリアはさ、どこに行っても、なーんか知らないけどM属性っていうの？ 僕をぶってくださいユリアしゃま、私を蔑んでくださいユリア様、みたいなひとに好かれるじゃない？」

「とんだ迷惑だ」

温厚で、ひとの悪口を滅多に言わないユリアにしては冷たく言い放つ。

「あたしはあたしでさ、買い出しとかで街中に出るたんびに、変なおっさんたちがわらわら寄ってきては、お嬢ちゃん、おっちゃんとかちよめちよめせえへんかゝ的なことを言われるじゃない？」

いつもは使わない、北ヴェランダアクセントで戯けた風に言うてから、ニーニヤは顔を盛大にしかめると、

「良い迷惑よね、まったく。こっちは興味ないつつうのっ！」

ね！と同意を求めれば、ユリアは枕につつぶしたまま、こくりと首を縦に振る。 やや大袈裟にため息をついてから、ニーニヤは天井を仰ぎ見て口唇をとがらせた。

「あたしがちょーっと人より胸がでかくて、ちょっと身長が低くて、ちょっと声がロリ声で、ちょっとふわふわしたスカートばっかり穿いてるからって、あたしがロリータだってことにはならないのね。これしか似合わないんだっつもの。それにさあ、ロリータだからって、おっさんが好きとは限らないでしょ。ロリータだったらみんな、おっさんと付き合うのかったの。ユリアだってさ。ちょっと人より背が高くて、スレンダー美人で、ちょっと脚線美がひとよりもえろくて、肌が浅黒いんがこれまたセクシーで、ちょっとスリットの入ったロングスカート穿いてるからって、即、女王様気質だとは限らないじゃない？ ユリアって、どっちかっていえば癒し系だし」

一気にそこまで言うてから、もう一度、先程よりも大きなため息をついて、

「あゝあ。 シーニヤ先輩が羨ましい〜」

そう言うニーニヤの顔からは、嫉妬の色はまったく見えず、純粋な憧憬のみが頬に色を添える。

「だってさー、シーニヤ先輩ってば、あんなにグラマラスでセクシーなのに、ちゃんと優しくて、凄腕の賢者だし、なんていうかあれなんだよね、ギャップ萌え？ 色っぽくて癒し系って、ほんと憧れる！ しかもさ、色っぽいっていても、いやらしい感じじゃないし、おっさんとかに、お嬢ちゃん、おじさんと良いことしようとかって言われる雰囲気じゃないし。 ああもう、何であたし魔導士なんだろう！ 賢者になりたかったよ！ そしたらさ、ロリータの白衣の天使って感じで、それはそれで良いと思わない？ 今からでも転職出来ないかなあ。 賢者クラスって、もう今年はいっぱいな

んだっけ？」

絶え間なく髪を梳いていたニーニヤの手をやんわりと止めて、ユリアがゆつくりと寝返りを打つ。横目で、シーニヤ・エモリスの雄姿に思いを馳せているニーニヤを見やって、ユリアは小さく息を漏らした。

「そうだな……。そんなことを言えば、私は、転入生が羨ましい」

「リオ先輩？」

「そう……。私と同じで胸だか尻だか分からない体型だが、シール先輩は小さくて可愛らしい感じだろう？それに、声だって私みたいなんだみ声じゃないし、肌だって透き通るみたいに真っ白だし、妖精みたいな容姿に、完璧に上品な仕草で、しかも凄腕の魔導士だぞ？格好良すぎだろう」

ほう、と切なそうにため息をつくユリアは、校則では許可されていないパニエを仕込んで、ふわふわと横に広がるスカートに身を包んでいるニーニヤと目を合わせると、

「世の中、なかなか思い通りにはいかんもんだな」

「ほんと、世の中ってあたしたちに喧嘩売ってるよね」

真面目な顔で頷くニーニヤの言葉に、思わず吹き出すと、二人しごくすくと笑い合った。

Scene 3 : そして君は微笑み、言葉は溶ける

雨が、ヴェランダでは珍しい雨が、しとしとと降り続けている。  
窓の下半分は蒸気で曇り、窓枠が時折、風に煽られて、かたかたと小さな音を立てる。

白い木で出来た窓枠に、小指の爪ほどの小さな引っ掻き傷を見つけた。

こんなもの、前からあっただろうか。

そう。いつから出来たのか、いつからそこにあったのか。そんなことにも気が付かない。自分の周りにあるものはすべて、これからもきつとそこにあるのだらうと思っている。

愚かな。

自分を、大きな声で嘲り笑うことが出来たなら、少しは気が晴れるだらうか？

そんな考えを頭の隅に押しやって、ユリアは、涙で瞳を潤ませているニーニャに焦点を戻した。

「いつ、聞いたんだ」

「つい、さっき」

「その……、本当なのか？」

「だって、本人がそう言ってるんだもん」

「いや、もちろん、それはそうなんだが。しかし、なんとか、急過ぎないか？」

「知らないよ、そんなこと！」

「ニーニヤ……」

「あたしだって、シーニヤ先輩がそんなこと考えてたなんて、まったく知らなかったんだから。あたしは、ただの後輩で、シーニヤ先輩の親友でも何でもなし、シーニヤ先輩と一緒にお仕事したことだってないし。そもそも、比べるのが悲しくなるくらいレベルの違うひとなんだから。でも、あたし、シーニヤ先輩には、可愛がってもらってるのになって思ってたの。だから、こんな形でこんな風に……。ごめん、ユリア。ユリアに当たり散らしても仕様がないうね。やっぱ、ちょっとショックなんだと思う」

「それは仕方のないことだろう。私のことは、気にするな」

そのニュースを、ニーニヤが運んできたのは、ほんの数十分前。

ドアを破壊しかねない勢いで開けて入ってくるなり、床に崩れ落ちるように座り込むと、「あたしの人生、もう終わった！」と大声で泣き叫び始めたニーニヤを、ユリアは目を丸くして見つめた。それから、何度か瞬きを繰り返して、精神の落ち着きを無理矢理取り戻し、ニーニヤの肩を抱いて、何事かを聞き出した。

「シーニヤ先輩が、シーニヤ先輩が！学校、辞めちゃうんだって！」

絞り出すように紡がれた言葉は、もちろん、ニーニヤの口から出たものだったので、蚊の鳴くような声とはほど遠く、代わりに、ユリアの鼓膜をびりびりと揺らした。

「嘘だろう？」

それくらいしか、ユリアには返せず、そしてそれは、ある意味真実だったと言える。

シーニヤ・エモリスという存在は、今や、学校の代名詞であり、彼女が『<sup>セイント</sup>聖』の称号を得たその翌年には、入学志願者が五倍になったという。彼女の力リスマ的な立ち居振る舞いは、各国の魔導士協会からも絶賛され、生きた伝説のように扱われている。

その彼女が、学校を辞めるというのはすなわち、炭酸飲料から炭酸を抜いてしまうということだ。炭酸の抜けてしまった炭酸飲料に、果たして何の魅力があるう。そして、彼女を師と崇め、尊敬し、彼女に追いつこうと必死に鍛錬を重ねてきたニーニヤにとって、まさに「人生の終わり」に最も近いことであろうことは、容易に想像がついた。

ぐすつと大きな音を立てて鼻をすするニーニヤを、ユリアは同情を込めて見つめた。

リオ・スシールがいなくなれば、自分もこんな思いに駆られてしまふのだろうか。

その時だ。控えめなノックがあつて、ニーニヤとユリアの名前を呼ぶ声がある。

「ど、どうぞ」

その声の持ち主に、すでに落ち着きをなくしたまま、ユリアが返事をすれば、扉が開いて彼女が部屋へと足を踏み入れた。

「今、大丈夫かしら？」

彼女 リオ・スシール は、ほんの一瞬だけ、泣き顔のニーニヤを見やって目を瞠ったものの、何事もなかったのように微笑んでみ



せる。

「あ、はい」

答えてから、やにわに、彼女が座る場所を探しているのだと気づき、ユリアは慌てて部屋の備品である椅子を、学習机の下から引張り出してきた。どうぞ、と差し出せば、ふわりと微笑して、優雅に腰をかける。

「あたし、あんまりまどろっこしいことは好きじゃないの。だから、単刀直入に言うね」

いつそ澁刺とした顔つきで、リオ・スシールがゆっくりとニーニヤとユリアの瞳を順番に見つめ、

「明朝、あたしも学校（いっしょ）を出て行くわ」

「……え？」

「シーニヤが出て行ってしまうのは、もう聞いたのよね？」

「あ、はい」

シーニヤ・エモリスの名前に、ニーニヤが顔を背けたのを見逃さず、リオ・スシールが苦笑する。

「ニーニヤちゃんたら。拗ねているの？」

「拗ねてません。ショックなだけです」

上級生に、こういう口をきけるのは、そして許されてしまうのは、つくづくニーニヤの特権だと感じる。

「そうねえ。ショック、と言えばショックだけれど。でも、これで何もかもが終わったわけではないでしょう？」

「終わりですよ。完全に、終わりですよ。だって、あたし程度の魔力で、この先、シーニヤ先輩と仕事とかで顔を合わすこともないだろうし、よしんば会えたとしても、何年先のことになるやら。そんな先に、シーニヤ先輩があたしごときを覚えているかどうかなんて、怪しすぎるし」

「あら。随分と、自分のことを過小評価するのね。どうして？」

「どうしてって……」

「たかだか、魔力の善し悪しで？馬鹿げてるわ」

きつぱりと言い切ったその言葉に、ニーニヤは不満そうに眉を顰め、ユリアは眩しそうに目を細める。

「あのね。シーニヤは、自分のことを多く語りたくないだろうから、代わりにあたしが言うんだけど。シーニヤは、とびきり才能のある魔導士であり賢者よ。それは、認めます。でも、生まれた時から、何の苦勞もなしにああなったわけじゃないの。彼女、今は呪文詠唱なしに魔法の発動が出来るだろうけど、そこに至るまでにものすごい量の鍛錬を積んでいるんだから。賢者であるが故に、攻撃魔法に触れる機会が少ないからって、わざわざ魔導士のクラスにもアテンドしているし。知識だけなら、一介の魔導士以上のレベルだと思う。そういうね、それ相応の努力をしているひとを相手に、あたしごときとかあたし程度とか、そういう風に自分を蔑んで、自分を哀れむのは、ショックを受けたって言わないの。そういうの、ただの子供っぽい拗ねた態度だと思う」

むっとした表情を隠そうともせずに、ニーニヤが口を開きかけたとき、扉が開いた。今度は、ノックもなしに。

「おいおい、リオ。ひとのいいひんところで、勝手なこととは言

わんで欲しいなあ」

いつもの、世間を斜に見たような笑みを浮かべて、シーニヤ・エモリスが靴音を立てて、近付いてくる。突然の来客に、言葉を失ったニーニヤにシニカルでいて優しい眼差しを向け、シーニヤ・エモリスは、

「ニーニヤ。さっきは、あんたの話も聞かんで、こっちの都合ばかり話してしもたな。なんや？ さっき、ニュースがある言うて、うちに話しかけてきたやろう？ 気になってなあ。良かったら、話してくれへんか？」

今度こそ拗ねて、そして多分は嬉しくて恥ずかしくて、ニーニヤは俯いたまま何も答えないでいる。シーニヤ・エモリスとリオ・スシールは、お互いを見やってから、

「お前のせいやぞ、リオ」

「何言ってるの。元はといえば、あんたのせいでしょ、シーニヤ」

と、睨み合っている。

「ニーニヤのニュースっていうのは」

多少、お節介な気もしたが、ニーニヤがあれだけ嬉しそうにしていた事実を知る者としては、黙ったままではいられない。おずおずとユリアが口を開き、先輩二人の視線をこそばゆく感じながらも、ニーニヤに止められる前にとやや早口で言った。

「ニーニヤ、呪文詠唱なしに魔法発動が出来るようになったんです」

「へえ！」

「すごいじゃない！」

「あほ。お前は、呪文詠唱なしの難しさなんて、知らんやろが」  
「失礼ね。呪文を覚えてから呪文詠唱を省く方が、魔法の威力が増すから、あたしだって火の魔法<sup>フォーコ</sup>呪文、全部暗記したんだから。大変さは分かっているつもりですー」

「何や、退化してんのんかいな」

「うつるっさいなー、シーニヤは。とりあえず、今はあたしのことじゃないんだから!」

「それもそうやった。退化し続けるお節介魔導士のことは、放っておこな」

「一言多いのよ、いちいち!」

痴話喧嘩にしか見えない言い争いを繰り広げる、天才魔導士ふたりを目の前にして、ニーニヤが堪えきれずに吹き出した。

「なんやねん、ニーニヤ」

「え? え? 何かおかしかった?」

「お前の顔はいつも、道化師ばりの面白さやで」

「もう! シーニヤはちょっと黙っててよ、この性悪癒し系!」

「なんやと!」

「図星つかれて怒るなんて、なんて程度の低い『<sup>セイント</sup>聖』なのかしら?」

「お前な、言うて面白いことと面白いことがあんねんぞ」

「だったら何よ、自分は、いつでも面白いことが言えるとも思っているの? とんだ天然お笑い芸人<sup>コメディアン</sup>ね。学校辞めて家業継ぐ代わりに、そのまま芸人にでもなったら?」

「外面良だけの金喰い公女!」

「言っただわね!」

ますますヒートアップする五十歩百歩な言い争いに、ユリアは信じられないと首を振り、ニーニヤは笑い転げる。

「せやから、何がそんなにおもろいねん、ニーニヤ」

「だって……！　だって、シーニヤ先輩でも、狼狽えたり、苛々したりすることあるんだなあと思ったら。　しかも、口喧嘩の相手が、公女様だなんて……。　面白くって！」

「あんなあ、ニーニヤ。　何を勘違いしてるか知らんけどやな。　うちかて、普通の人間やねんで。　あんたが、ちゃんと練習して呪文詠唱なしに魔法を使えるようになったように、うちかて笑うし怒るし、トイレも行くしやな」

「シーニヤ！」

顔を真っ赤にしたリオ・スシールが窘める。

「つまりや。　うちとあんたとの差なんてな、そんなにないねん。　同じように、うちという人間の上に、どんな称号が乗ったっていようと、うちという人格にはあんまり関係がないねん。　せやから、うちが学校辞めるから言うて、いきなりうちがあんたの人生から消えるわけちゃうねんで」

「シーニヤ先輩」

「ああ、こういうのんは、ガラに合わんわ」

心なしか上気した頬を、乱雑に髪の毛を掻きむしることで誤魔化して、シーニヤ・エモリスは歯を見せた。

「とりあえず、また後で、や。　な？」

「……はいっ」

「またいつか、会えるさかい。　な？」

「……うつつ、……は、はいっ！」

「ユリアちゃんも。　また、ね？」

先程まですごい剣幕で声を上げていたとは思えない、淑女の根本のような仕草で、リオ・スシールが手をユリアに差し出す。

「あなたも、出来るようになったんでしょ？」

「なにがですか？」

「呪文詠唱抜きの魔法発動」

「……」

「別に、嘘をつく必要も、謙遜する必要もないわ。だってあたし、あなたが練習してるところを、偶然見てしまったんだもの」

「……………」

言いたいことが、言葉にならない。頭の中を、言葉の欠片が漂っている。それを掴んで、口から出すことが出来なくて、ユリアは困ったように眉根を下げた。

「大丈夫。全部、言葉にしなくても、良いの」

その言葉に、どれだけ感謝したかったか。それすらも、言葉に出来ない自分を、どれだけもどかしく思ったか。

## Scene 4：特別な日

自分は、自分でしかなくて、それ以上にもそれ以下にもなれないのだと思っていた。それは、自分を受け入れるだとか認めるだとか、そういうポジティブな響きを持つものとは少し毛色が違ったように思う。

今にして思えば、あれは諦念に似ていたのではないだろうか。

でも、それも終わりだ。

気付いてしまったことには、もう目を背けられない。認めてしまった自分の心は、これ以上無視出来ない。知ってしまった真実からは、もう後に退けない。そして何より、味わってしまった夢の欠片は、なかったことになって出来ない。決して。

「へへ。どうだった？」

いつも、綺麗なツインテールに結わえられている栗色の髪を散々に乱して、教員室の一部である面接室から出てきたニーニャは、鈴を転がす可憐な声と子供ギャングの大将の顔で言った。

「概ね、想定していた通りだ」

魔法学校のトレードマークでもある制服の襟元を正して、ユリアは薄く笑う。

「そっちこそ、どうだったんだ？」

「めっちゃくちゃ怒られたよ。気の長いあたしも、結構失礼なこ

と言われちゃってさ。ついつい机に乗り上がって、カプア先生の胸倉掴んじゃったよ。えへへ」

「お前が気が長いだなんて初耳だが、突っ込むところは最早そこじゃないだろうな」

その笑顔だけ見れば、中高年の癒しアイドルにもなれそうなのに。どうしてこんなに喧嘩早くて、その上短気で向こう見ずなんだろう。ルームメイトの第一印象を裏切る中身に、ユリアは今更ながら思いを馳せる。

「でもまあ、それも」

「そう」

苦々しくも清々しい気持ちで微笑むと、ニーニヤも同意するように笑みを大きくする。

「想定内」

同じ言葉を真顔で、廊下で見つめ合って呟いたかと思えば、くすくすと肩を震わせて笑うふたりの姿は、他の生徒たちからは余程奇異に見えたことだろう。

「一旦、部屋に戻ろう」

「うん。お祝いしなくちゃだね」

違う理由で提案したユリアは、ニーニヤの言葉に首を傾げた。

「祝う？ 何を？」

「もちろん」

と人差し指を顔の前に持ってくる、ニーニヤは自信満々に言い切



った。

「あたしたちの、新しい門出に決まってるじゃない」  
「なるほど」

吹き出してしまつてから、ユリアは不謹慎だつたかなと教員室に目を配つた。ニーニヤの底抜けに樂觀的な人生の過ごし方は、ユリアのともすれば生真面目過ぎる性格を上手く中和してくれる。

ヴェランデ国は、南北で国民性が随分と異なる。北方が商人として名を馳せているのに対し、南方は商品となるものを作ることを生業とする者が多い。北方の冬が厳しいのに対し南方は冬でも暖かく、気質がおおらかな人間が多い。

その条件から言えば、南方出身であるユリアは、おおらかで樂觀的、社交的でお祭り騒ぎが大好きな人間ということになる。が、それらの性格はおおよそユリアには見出しがたいもので、逆に、北方出身であるニーニヤは南方のステレオタイプのようである。

「ね。ね。前に街へ行つたときに買つてあつた、フルーツケーキ。あれ、食べちゃおうよ」

「え？ でも、あれは、特別な日のためにとっておくんじゃないか？  
つたのか？」

「もー。ユリアったら。謙遜もね、やり過ぎると嫌味なんだよう？ 今日が特別な日じゃなかったら、いつが特別な日なの？ 特別な日なんてね、待つてても来ないんだから。こっちから作っちゃわないと！」

屈託なく笑うニーニヤに、内心胸を撫で下ろす。数日前まではあんなにふさぎ込んでいたとは、今の彼女を見ると俄には信じ難いが、この切り替えの速さも、友人の長所だと思うユリアである。

「なに」

「ん？ 何がだ」

「にやにやしてる。ユリア。何？ 珍しいね。妄想？ それとも、超妄想？」

「なんなんだ、その超妄想っていうのは。それに、違う。妄想なんかじゃない。お前と一緒にするな」

「あ、言ったね！」

「お前が、元気になってくれたみたいで良かったなと思っていただけだ」

「え」

可憐というよりもコケティッシュな唇をすばめて、ニーニヤがぱちくりと瞬きを繰り返す。途端に耳まで顔を赤くすると、言葉を絞りだそうと口をぱくぱくさせた。どうやら、照れているらしい。

「な。な。何よ、何よ。ユリアだってね。吹っ切れましたってな顔してるんだから。清々しい、爽やかなスタートだぜ、人生やり直すぜって顔してるんだから！」

やけくそ気味に発せられたニーニヤの言葉に、今度はユリアが頬を赤らめる番だった。

確かに、あの日から、自分の中で何かのふんぎりがついたのは自覚していたが、それが周囲に分かるほどのものだったとは。感情を押し殺して生きていきたいなどと願っているわけでもないが、しかし、あまりにも分かり易いというのも困りものなのではないだろうかと思ってしまう。簡単な話、恥ずかしいのだ。自分が感じていることを他人に悟られるのがとても恥ずかしい。なのに、なのか、だから、なのかは定かではないが、感情を惜しみなく表現出来る人間が羨ましい。

お互いに紅を差したような頬をして、気まずそうに見つめ合ったのち、どちらかともなく笑いが漏れた。

「ユリアって、意地っ張りだよな」

「お前もな」

目を細めて、挑戦的な微笑みで言うニーニヤに、伏せ目がちに応えるユリア。

教員室のある廊下を後にして、自室に向かう。窓から見える魔法鍛錬場は、ちょうどユリアたちの学年が実技の訓練中だった。

「なんかさ。ちょっとまだ、信じられないんだよね」

「そうだな」

ゆっくりとは言わないまでも、通常よりかはゆったりとしたペースで歩きながら、同級生たちを眺めた。

鍛錬場ではふたつのグループが指導官の下、懸命に魔法の詠唱を学んでいる。ひとつは魔導士。もうひとつは、賢者だ。

「ずっと、そうだったら良いなって思ってたの。あたし。でも、今までそれが実現出来るなんて思ってもみなかった。だってそうじゃない？ 魔力検定の石は嘘をつかないもの」

「歯向かってみても、な」

「でもさ」

窓辺に近寄って、ニーニヤが立ち止まる。どこか懐かしそうに、それでいて未来を見つめる瞳でユリアにだけ聞こえる声で言った。

「やってみなくちゃ、分からないよね」  
「……ああ」

答えたユリアにも、勝ち気に歯を見せたニーニヤにも、脳裏に浮かんでいたのは同じ人物の筈。

「偉大だな」

ぼつりと呟くと、ニーニヤがツインテールを弾ませて頷いた。

「シーニヤ先輩も、スシール先輩もね」

またしても、ふたりで見つめ合ってふふふと笑い合うところだった。教員室からしかめっ面をした教官が廊下に出てくる。

「カプア先生」

人なつこい声で呼びかけたニーニヤに、先程よりも色濃く刻んだ眉根の皺はそのままに、カプアは手にした紙切れをかざして大仰にため息をついた。

「まだここにいたのか」

「ごめんなさーい」

まったく罪悪感を感じさせない、新風のような口ぶりのニーニヤに、カプアは一度目を見開いてみせる。信じられない、とても言いたそうに。それから、ユリアの方に目を向けた。

「君も、らしいな」

「はい」

「まったく。何を考えているのか、私にはさっぱりだよ」

「でもあたし、カプア先生に理解されたくて、ここに来たんじゃありません」

「ニーニャ！」

あまりに過激な発言に、ユリアがニーニャの袖を引っ張る。しかし、カプアはこれには頬を緩める。

「分かっている。だが覚えておけ。年長者の苦言というのは、後からでしか理解出来ないものだということも、な」

ニヒルに片方だけの眉を上げると、手にした紙切れを窓とは反対側にある壁に貼り付ける。神経質な彼らしく、きつちりと四隅を手で押さえて、浮いたところがないのを確認すると、ふたりには見向きもせずにとりつく島もなく去っていつてしまう。

「相変わらず、堅物だなーカプア先生は」

「お前が挑発するからだ」

ばか、とニーニャの向こう意気の強い性格を批判してみるが、本人はあっけらかんとしたものだ。また問題になったらどうしようと危惧するユリアを背に、先程貼られた紙へと歩み寄ると、ニーニャは破顔した。

「ユリア！ 見て見て！」

「……なんだ」

億劫そうに言いながらも、ユリアも紙が貼られた壁の方へと近寄る。紙に書かれた内容を一読すれば、彼女も、抑えきれない笑みを顔中に広げた。

「お祝い、しなくちゃだな」  
「もっちゃん！」

紙に書かれた内容は、こうだ。

『専攻学科変更のお知らせ  
ニーニャ・ガルダス  
魔導士学科から賢者学科  
ユリア・モースタン  
賢者学科から魔導士学科  
以上、二名の学生の専攻学科変更をここに認める』

Scene 5 : How extraordinary this ordinary

や。や。やっと、更新、でき、た……（ばたり）。

忘れられた頃に更新される小説として悪名高くなってませんでしよ  
うか。な、なってますよね、きつと（汗）

すすすす、すみません……！！

Act IIIはあともうひとつで、終了です。

そうしたら、もっと書きやすいあのひとがついに登場です！

読んでいただければちやうと思つのですが、私、シーニヤが  
かなり好きなのです。好きすぎて、どんどん彼女の出番が増えてしま  
いました（滝汗）

ある日、ニーニャに突然腕を掴まれ、校内を走らせられた。起伏が激しいというか、行動が突然というか、予測出来ないことを予測出来ない速度で行動に起こすというか。兎に角はちやめちな行動が多いニーニャではあるが、これにはさすがのユリアも目を丸くした。

手首を掴んだまま、前を一心不乱に走るニーニャについていくので精一杯で、疑問を挟む余地などない。とうに二人とも息は上がっていて、会話をするどころか、足がもつれないようにするのに集中しきっていた。

「ど、どう、した」

息も切れ切れながら、少ない言葉で何とか尋ねてみる。

「いい、か、らっ」

案の定というか、ニーニャらしいというか。何の答えにもなっていない答えが返ってくる。ちらりとこちらを振り返ったニーニャは、チャーミングに片目を瞑ってみせる。

広大な敷地を擁する魔法学校は、四方を高い壁に挟まれている。

この学校から、次代を担う大魔導士や賢者が生まれるのであるとすれば、ここで育てられる才能の卵ひとつひとつが重要機密になりかねない。というのが学校側の見解だが、生徒として身を置くユリアにしてみれば、取り越し苦労に過ぎないと思う。もともと、ニーニャに言わせると、自分を高く売ったもん勝ちなのだから、あながち学校も馬鹿ではない、ということらしいが。

その四方の壁から校舎までは更にまだ距離があるので、よしんば壁の上によじ登れたとしても、授業風景などは見えないのが現状だからこそ、ユリアは学校の神経質さに嘆息したくなる。



そして今、ニーニヤに手を引かれて走り続けるユリアは、その壁のひとつに向かっていた。

灰色の無愛想な壁が目の前に近付いてくるにつれ、走る速度を段々と緩めはしたものの、ここまで全力疾走してきたせいで、上がった息はまったく整わない。息を吸うと同時にひゅうひゅうと肺が悲鳴を上げる音までする。幸い、最近気温がぐっと下がったおかげで、あまり汗をかかずにすんだ。

「に……」

膝頭に手の平をおいて、背を丸めて息をしているニーニヤのツインテールに声をかけようとした。

「おーおー。そない走らんでもええのに」

ひとを小馬鹿にしているような、それでいてこちらを労るような独特の口調。入学と同時にヴェランデ標準語に変える生徒が多い中、北ヴェランデアクセントを使い続ける、その甘い声。

肩を上下させたまま、声がした方向に視線を向けた。

やはり、というべきか。

見知った顔はそのままに、いつもよりも少しだけ困ったような、苦笑に酷似した笑みを浮かべて、そのひとは壁の上に腰掛けていた。タイトなミニスカートは黒。そこからすらりと伸びる脚は黒いタイツに覆われていて、足元はごつい黒のレースアップブーツ。もちろん、ヒールなんてついていない。シンプルな服装なのに、足を組んでこちらを見下ろすたったそれだけの仕草がとても色っぽい。そう、同性ですら見惚れるくらいに。

「し……」

「ああ、ええて。まだ息が上がって喋られへんのやろ？ 無理せんでええ」

首を軽く左右に振って、ユリアの言葉を止めると、軽い身のこなしで壁から降りてみせる。結構な高さがあるはずなのに、大した音も立てずに着地する様は、猫のよう。

黒のノースリーブタートルの上には、真白いマント。防寒用にしては少し生地が薄い気がするが、彼女は寒さなど気にしていないように、ぜいぜいと息をするユリアとニーニヤとを見つめていた。

闇夜にあっても光り輝くであろうダークグリーンの双眸を細めると、す、と片手をふたりにかざす。

「あ……」

ニーニヤが小さく感嘆の声を洩らした。それもそのはず。あれだけ体中に広がっていた倦怠感が、ふわりとどこかへ浮いていくように消えていく。そして代わりに注入されるのは、夏のお日様にあてられたような暖かい充足感。

「どや？ ちょっとはましになったか？」

リクベラシオンメンデメホーラ

回復と精神向上を同時に、しかも複数の人間に。その上呪文詠唱なしで。顎が外れるくらい桁違いな魔導の才を見せつけられて、ようやくユリアは今のこの状況を現実と認識出来る。自分が今対面している相手が、そういった非現実を扱う人物なのだと。非現実なほどの魔導で、現実感を感じるだなんて、おかしい話ではあるが。

「ありがとうございます、エモリス先輩」

律儀に礼をするユリアに、シーニヤ・エモリスはふんと鼻で笑って応える。

「いいや？　ここまで走ってもろたんは、うちやさかいなあ。これくらい、礼を言われるうちにも入らんわ」

さばさばと言いつてから、首だけを校舎の方に向ける。小さく、  
「ふん……。頭の堅い教師に勘付かれると、ややこしいことになるな。ちよつと、消そか」

「消す？　何を？」

「ちよつとの間、見えへんようにすんねん」

言つや否や、三人を白く淡い光が包み込む。半球体をしたそれは、こちらからは磨りガラスのように外が見える。

好奇心に駆られて、ニーニヤがそれに触れようとしつつ、半身だけをシーニヤ・エモリスに向ける。

「これ、なんですか？」

「んー？　何やるな。オリジナルやから、名前はないんと違う？　教科書にも載ってへんし、一応歴史書にも目を通したけど、それにも載ってへんかったわ。似たようなんなら、色々載ってたけどな」  
「オリジナル、ですか」

決して浅くはない魔導の歴史の中で、複合魔導や混合魔導と呼ばれる類は、えてして難易度が高い。効果と呼ばれるほどの効果すら起こせず、机上の論として扱われるだけのものも多数ある。その中で、オリジナルを作り出せるというのは、並大抵のことではない。目を瞠って、というよりも目をひんむいて凝視するふたりに、シーニヤ・エモリスは片眉を上げて困ってみせる。

「なんやなんや。そないな顔せんでもええやんか？　たかがオリジナルのひとつやふたつや。それも、そこまで実戦力はない類や。別に自慢するようなことやないで」

「聞いても分からないかもしれませんが、ひとつ、お尋ねしても良いですか？」

「ユリア。あんたのそれは、美德かも知れへんけど、あんまり褒められた癖とちゃうなあ。必要以上に自分のことを謙るのは、逆に相手に失礼になったりすんねんで。あんたは、自信過剰になる心配がない代わりに、もうちよつと、自分のことを客観的に評価する癖をつけた方がええわ。……と、説教臭くなってしもたな。あかんない。年やな。ほんで、何や？ 聞きたいことて」

「今の、この光の膜、何の複合魔導なんでしょうか？」

「外側が迷彩で、内側が沈黙、カムフラヘ 仕上げに半径一キロほどに回避をかけただけや。周りからはうちのことは見えへんし聞こえへん。そんでもって、こつち近くに來たとしても、魔導が発動しているとは気付かへん、ちゅうわけや。今日みたいな日にうってつけやと思わへんか？」

そう言つて、片頬だけを動かして微笑む彼女は、暫くぶりに見たからこそ、直視するのも憚られるほどに美しかった。

「呼び出して悪かったな、ニーニヤ」

少しだけ、声のトーンが変わる。それを感じ取ったユリアは姿勢を正し、ニーニヤは再会の感動で潤んだ瞳はそのままに、何度も首を左右に振った。

「いいえ！ そんな、悪いだなんて。嬉しかったです。本当に」

ユリアの心中を読んだのか、それともその質問をあらかじめ予測していたのか。どちらにせよ、内心、どのように尋ねれば良いのか考えあぐねていたユリアにとっては好都合だった。

「ニーニヤにな、うちが連絡を取ったんや。うちは確かに、この学校の自慢の種のひとつかもしれへん。せやけどな、同時に厄介な

問題児でもあったさかいな。煙たがられてるねん。そんなうちが、生徒のひとりに会いたい、言ったらどうなるか、まあ予想はつくわな。それでなくても、ここを出るときに、金輪際、在学生との接触は取らんでくれ、言われてるからな」

「どうしてですか？」

「悪影響やからとちゃうか？」

「そんな！ シーニヤ先輩が悪影響なら、他のどの先輩だって悪影響ですよ！」

「ははは。可愛いこと言うてくれるやんか、ニーニヤ」

言いながらも、ニーニヤの言葉に心動かされた様子はなく、シーニヤ・エモリスはその猫科を連想させる瞳を細めて、ユリアに視線を動かした。

「……なんですか？」

「これ。預かりもんや」

一目で上等なものだと分かる、一通の封筒。少し小振りなそれは、シーニヤ・エモリスの手にすっぽりと収まっている。封筒の角のひとつを指でつまんで、ユリアに差し出した。

「私に、ですか？」

指先に触れた封筒は、見た目から想像された通り、とても滑らかな手触りをしていて、いよいよ上質なのだと理解する。封筒の表には、黒のインクでユリアの名前。裏側にはゴールドの封蝋。そこに押された印璽いんじの紋章に、目を瞠った。

「これ」

それ以上、きちんとした言葉を口に出せずに、驚いた顔のまま、シーニヤ・エモリスを見上げる。彼女は、普段見せるひとをからか

うかのような笑みではなく、優しく思慮深い微笑みをたたえていた。

「手紙、書いたんやって？」

「え？ え？ なに？ なに？ ということ？」

ひとり、事情の飲み込みめないニーニヤがツインテールを揺らしながら、ユリアの肩越しに封筒を見ようとする。

「え！ それ、その印璽って、まさか！」

そこに押されていたのは、紛れもなく、ロクサンヌ公国の王家のもの。

「ちょ、まさか、それって、リオ先輩からの手紙なの？ え、なんで？ なんでなんで？ ユリアってば、なんでまた。リオ先輩から直々にお手紙もらっちゃうの？ すごいんだけど！ でも、なんで？」

矢継ぎ早に繰り出される感想と質問に、ユリアは首を傾げるしかない。

その答えは、目の前に立つ『聖』からもたらされた。

「リオに手紙、書いたんやろ？ 喜んでたで。知り合って長くもないあんたに、手紙をもらえるなんて光栄や、ってな」

「ユリア、リオ先輩にお手紙書いたの？」

「……ああ」

「そっか」

「なんで、とは聞かないのか？」

目尻が下がるほどに笑みを深めた友人に、ユリアは眉を顰めてしまふ。あれだけ好奇心全開で質問しておいて、ここで引かれると、

逆に不自然だ。

「だって。書きたかったから、書いたんでしょ？　良いじゃない、それで。返事もらえて、良かったね」

「……ああ」

「リオな。実は、別にこの学校に来る予定と違<sup>ちが</sup>てん。うちが、無理矢理引<sup>ひ</sup>つ張<sup>は</sup>つてきたようなもんやから。学校は、うちが退学した理由は、リオやと思てる。そんなんとちゃうのにな。やから、ユリアに返事を書いて送<sup>おく</sup>っても、きっと学校が受け取り拒否するやろうって思ったみたいやな。それで、うちにおつかいを頼<sup>たの</sup>んできたわけや」

「ありがとうございます」

ユリアは、深々と頭を垂れた。他に、どうすれば良いのか分からない。返事が欲しくて手紙を書いたんじゃない。そう言ってみようかとも思ったが、それを言っ<sup>つ</sup>てどうなるのかは分からなかった。ただ、返事を書いてくれたリオ・スシルへの感謝と、これをこま<sup>こま</sup>で届<sup>とど</sup>けてくれたシーニヤ・エモリスへの感謝を、他にどうやって伝えれば良いのか分からなくて、ユリアは長い間頭を下げ続<sup>つづ</sup>けていた。

「っていうのも、実は口実<sup>くじつ</sup>でな」

視線を下に向けていたから、それを言<sup>い</sup>ったシーニヤ・エモリスがどんな顔をしていたのか分からない。

「うちもな、会<sup>あ</sup>いに来<sup>き</sup>たかってん。ニーニヤ。これは、あんたにや」

はつと息を詰める音がした。あのお喋<sup>しゃべ</sup>りなニーニヤが、あの口から生まれてきたのでなければどこから生まれてきたのか分からない評<sup>ひょう</sup>されるニーニヤが、言葉もなくして傍<sup>そば</sup>らに立<sup>た</sup>っている。

「泣きなや」

片眉を上げながらも苦笑するシーニヤ・エモリスは、手の平に置いたそれをニーニヤが受け取らないので、仕方なくそれをもう一度握りしめる。もう片方の手で、ニーニヤの後ろ頭を撫でてから、ぐいと自分に引き寄せた。たたらを踏むように、ニーニヤが憧れ続けた先輩の方に近付く。必然的に、意外と背丈のある彼女の胸に頭を置く形になったニーニヤは、その白い肌をさつと赤らめて硬直してしまう。そのショックからか、すっかり涙が乾いたニーニヤがそつと視線を上げると、シーニヤ・エモリスのそれと真つ向からぶつかった。

「泣かんでええ。な？」

こくこくと必死に頷くニーニヤに、シーニヤ・エモリスは朗らかな笑顔になる。ニーニヤの涙に濡れた頬に残った雫を指ですくつてから、閉じていた手の平を広げてみせた。

「これ……」

そこに置かれたものを凝視する。何度見ても変わらないそれに、それでも信じられないとニーニヤの顔が叫んでいる。

「ユリア……」

リオ・スシルからの手紙を手にしたまま、傍観者に徹していたユリアの方を向いて、ニーニヤが困った呈で呼ぶ。

「どうした」

気の利かない言葉だとは思いつつ、それしか口をつかなくて、自分の不甲斐なさに後ろ頭を掻きつつ、ニーニヤの元へと歩み寄った。  
「これ」

大きな瞳をこれでもかと見開いて、ニーニヤが指し示すそれを見



て、ユリアもまた絶句せざるをえなかった。

シーニヤ・エモリスの手の平の上に置かれたのは、紛う事なき魔力検定の石。小振りなピアスサイズのその石は、ユリアにもニーニヤにも見慣れたものであったし、この学校に通う生徒なら誰でも手にしているものだ。魔力検定の石は、手にした人間の素質を汲み取って、様々な宝石へとその質を变じる。いわば、魔導に携わることを考える人間が真つ先に手にする魔導具が、魔力検定の石だといえなくもない。

ニーニヤが持っているものはルビー。火の魔導士であることを意味する。ユリアが持っているのは、パール。これはユリアが賢者の資質を持っていることを示す。今、ふたりの目の前にあるそれは、オパールだった。それも、とても色の薄い、ウォーターオパールと呼ばれるもの。オパール自体も珍しい。魔導士というのは、何かひとつの特性魔導に強化した者が多い中、オパールを手にする魔導士というのは、全ての特性魔導を操れる。その中でも極めて特殊なのがウォーターオパール。これは、賢者の資質を持った魔導士が手に入れられるものと、図書室の資料や魔導歴史などで繰り返し教えられてきた。そしてその資質を持った者は、『聖』の称号を与えられるのだと。

それが、目の前にある。

眼前の宝石と、頭の中に入っている知識とが、上手く噛み合わない。そのふたつから導き出される結論はひとつしかないはずなのに、ニーニヤとユリアのふたりともが、回らない思考回路に翻弄されるまま。

「ユリア。リオからもらった封筒、開けてみ？」

思わせ振りに、シーニヤ・エモリスが言う。囁くようなその声に誘われるまま、ユリアがおぼつかない手で封筒の封を切った。

中に入っているのは、封筒と同じくらい上質な紙。それを広げてみれば、リオ・スシールの容姿を彷彿とさせる、流暢でいてどこかあどけない筆記体。

『ユリアちゃんへ

お手紙、ありがとう。とても、嬉しかった。

これをこのまま送れば、きっと貴方には届かないと思うから、少々柄が悪くて口の悪い郵便屋さんに託します。

この気持ちが、ユリアちゃんに届きますように。

リオ・スシール

P S ・ 気持ちばかりのものだけど、ユリアちゃんとあたしの思い出として、受け取ってくれると良いな』

簡潔ではあるけれど誠実な文面に、恥を忍んで文をしたためたユリアの気持ちが楽になる。

ただ、最後の文章が引つかかった。そして、その引っかかりを後押しするように、封筒の中の何かが指に触れる。

「どうしたの、ユリア」

「中に、何か入っているみたいだ」

「え？」

手紙を指で挟んだまま、封筒の口を開けて、もう片方の手の平の上へと逆さまにすると、ころんと小さなものが転げ落ちた。

「これは……」

手の平で赤く輝くそれは、またもや魔力検定の石。こちらはルビーのようだった。ニーニヤが手にしているのと同じサイズのそれは、光を受けて七色に変化するオパールと違って、煌々と意志の力を感じさせる光を放っている。『火』を示すものであると、一目で分かる。『火』の魔導士というのは、別段珍しいこともないため、それ自体には驚かない。ユリアが言葉をなくした理由は、ただひとつ。その石が、ピジョン・ブラッドと呼ばれるルビーだったからだ。

「ラス・ジャマス・デ・インフィエルノ」

上質のアルコールを彷彿とさせるまろやかな声で、シーニヤ・エモリスが言った。

「聞いたことあらへんか？」

「も、もちろん」

聞いたことはある。魔導に少しでも知識があれば、知らない人間なんて、いないはずだ。

ヘルフアディア  
紅蓮の名で知られるそれは、元々はオード帝国で見つかった。魔導士を輩出する歴史を持たず、あくまでもその屈強な物理的戦闘能力に秀でた騎士国家オードにおいてそれが発掘されたことによって、オードは一気に魔導界にも知られるようになった。

「『火』の特性魔導の中でも、より強く、より純粋な才を持つ者が手にすると言われている石ですよね」

教科書で読んだままを呟けば、ニーニヤも首を縦に振って同意する。

「プレゼントや、うちとリオから。ニーニヤが持ってたのが、うちの魔力検定の石。あんたの手にあるのが、リオのや」

「スシール先輩って、紅蓮持ち《インフィエルノ・デュエーニョ》  
《なんですか》」

「公にはしてへんねんけどな。色々、面倒なことになるさかい」  
「面倒なことって？」

「せやなあ。ロクサンヌは魔導の強い国やけど、国としては弱小  
やさかい、色々と政治に使われるかもしれんやろ、リオのその力が  
そういうのを、リオのおとんは嫌がるねん。ただの過保護かもし  
れんけど、まあ、国が関わってくるとなるとなあ。避けといった方が  
無難かもしれんわな」

「なるほど……。そ、それで、どうして、これを私たちに？」

「やから、プレゼントやて」

「でも、シーニャ先輩の石はどうなっちゃうんですか？」

大きな瞳を更に大きくして、ニーニャが尋ねた。

「どうもならへんよ」

動じず、落ち着いた視線をニーニャに向けてシーニャ・エモリス  
が言う。

「いらんから、それ」

「でも！」

「いらんねん。うちも、リオも。あつても、しゃあないねん。む  
しろ、あつた方が足枷になるねん。ほんまはな」

苦笑と共に、少しだけ視線を上方に泳がすと、またニーニャにそ  
れを見据える。

「捨てよかな、って言うてたんや、リオと。そしたらリオが、こ  
れの価値が本当に分かるひとに渡したらどうかって言い出してな」

「本当の価値？」

ヘルファイアー

サッシュ・ピアンコ

「紅蓮が凄いだの、白賢者が凄いだの、そんなどうでもええこと  
を言わんやつに渡す、ちゅうことや。そういう付加価値は、部外者  
が決めることやから。自分が誰か言っんは、結局のところ、自分で

決めなあかんから」

ふと、瞳が遠くへと移動する。シーニヤ・エモリスに今見えているそれは、自分たちには知り得ないものののだろうか。ユリアは想像した。隣に佇むニーニヤはきつと、それに嫉妬と羨望を感じているだろう。

「自分のやりたいことをやるために、専攻学科の変更をしたんやろ？ それの、お祝いやと思うてくれたらええわ」

「ご存知だったんですか」

「はは、実家が商家やからな。耳が良いねん」

「でも、シーニヤ先輩。こんな凄いもの、受け取れませんよ」

「なんで？」

「だって、これ、シーニヤ先輩の」

「うちの？ なんや？」

「それは……」

「うちのなんやろうな？ 魔力の源？ ちゃうやろ。ビジネスをする上での名刺？ それもちやうなあ。ほな、これは、なんや？」

「これは……、だから……、シーニヤ先輩の、あたしの、あたしが、シーニヤ先輩を憧れるきっかけになった……」

賢明に言葉を探そうとするニーニヤに、シーニヤ・エモリスはしつたり顔で微笑む。

「それは、あんた事やろう、ニーニヤ」

「あ！ そ、それは、えつと、だから」

「ええねん。苛めるつもりで言うたんやない。それで、ええねん。そついうあんたやから、これをもろて欲しいねん」

「で、でも」

「よーう考えてみ？ これ、あんたが受け取らへんかったら、うちは捨てるつもりなんやで？ どのみちいらん石ころや。これをもらったニーニヤが、後どうしようも勝手や。転売するなりなんな

り、好きにしたらええやん。どや。もろてくれへんか？」

「そ、それは……」

断れるはずもなく、ニーニヤはへの字にした眉毛をユリアに向ける。ユリアは、静かに石の置かれた手の平を閉じて、シーニヤ・エモリスに向き直った。

それだけで、頭の良い彼女には充分だったらしい。満足そうに小さく頷いてから、白いマントを揺らして一步下がる。

「シーニヤ先輩！」

不安な気持ちをそのままぶつけてしまえと言わんばかりに、ニーニヤが悲愴な声を上げる。

「そろそろ、行くわ」

「あ、あの！」

すでに背中を向けてしまっているシーニヤ・エモリスに、ニーニヤは尚も声をかけた。

「ニーニヤ」

何か、特別に言いたいことがあったわけじゃない。ただ、何かを言わなくてはいけないと思っただけなのだ。そんなニーニヤの気持ちが分かったユリアは、助け船を出せない口べたなおのれを恨む。そして、ニーニヤの収集のついていない言葉が発せられるよりも先に、シーニヤ・エモリスが彼女の名を呼んだ。

「は、はい」

その声が、いつもよりも威厳に満ちたものだったからだろうか。自然と、ニーニヤは背筋を伸ばして、返事をしてしまう。

白いマントに、真っ黒な衣装。月下で息をひそめる獣を思わせる身のこなし。気高い狼の瞳に、闇に瞬く星空の輝きを持った髪。そして、本当は、誰よりもおひとよしで照れ屋な、その深い愛情と広い心。

魔導の才だけではない。容姿、人柄、すべてにおいてニーニヤの憧れを具現化した先輩は、首だけでニーニヤを振り返ると言った。その目元が、少しだけ濡れているようにみえたのは、思い過ぎだったのだろうか。

「うちのこと、忘れんといてな」

「あ、あ……。当たり前です！」

震える唇を叱咤して、声を張り上げたニーニヤは、ぼろぼろと涙をこぼす。それを受けて、シーニヤ・エモリスは、

「おおきに」

言うやいなや、その姿がかき消えてしまう。

彼女のかけた魔導は痕跡さえも残さず言葉通り消滅してしまい、その場に残されたふたりは、呆然と空を見上げた。

晴れだとも曇りだともいえない、曖昧な空模様。雲の小さいのやら大きいのが、脳天気には漂っているばかり。風も、まったくなわけではなく、だからといって、びゅうびゅうと吹いているわけでもない。少し気温が落ちてきただけで、寒くもなく、また、あたたかくもない。

どこをどう取っても、平凡極まりない天気。

学校を囲む四方の壁は、依然として無愛想に立ち、校庭からは、魔導訓練に励む生徒たちの声が遠く聞こえる。面白味など感じられない校舎に、新鮮さのない風景が馴染む。

それでも。

この日を一生忘れないでいくであろうことは、容易に想像できた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9908e/>

---

眠り姫の起床時刻

2011年2月25日00時39分発行